
僕が奴隷である娘がご主人様

廻

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕が奴隷であの娘がご主人様

【Nコード】

N8009W

【作者名】

廻

【あらすじ】

春休みを満喫する相寄黒羽十六歳。もうすぐ高校二年生だなー、とかぼんやり考えている裏で、世界は動き始めていた……。異世界召喚モノではありません。目指せ毎日投稿！ 1話あたりが短いだから、イける筈だ！

プロローグ

家族仲よく河川敷でピクニック。

家族構成は、寡黙な父に、柔和な母、気性の荒い妹に、体力自慢の兄の四人。その実態は世界を守るスパイ家族とかでもなく、世界を征服するテロリスト一家というわけでもない。

どこにでもいる家族と、どこにでもある家庭を持っていた。

母が作ったサンドイッチのランチを食べた後は、お父さんが持ってきた釣り道具で釣りをする。それに飽きたら雑談など交わしながら、平らな石を探して水切りでもする。そこでお父さんが意外に上手かったり、一番下手だった妹がキレて八つ当たりをしたり。

けど、最後にあるのはいつも笑い。

そう、そのはずだった。

川の流れが急に速くなった。川で水浴びをしていた子供たちは親に言われて一斉に川から出た。

ドゴンッ！！ と川原全体が吹き飛ぶような衝撃波を伴って、何が降り立った。

そのまま水平に二〇メートルは吹き飛ばされただろうか。近くには彼の妹もその小さな体を横たえて気絶している。

目が飛び出るような、内臓を吐きだしそうになるような、そんな重圧がかかる。

視界が、擦れていく。

『l b s w 逃 k s t r b m s d b ッ! ?』

母親が何かを叫んでいるようだが、キーン、と耳元で爆弾が爆発したような状態で何を言っているのかさっぱり分からない。

そのとき、誰かが自分と妹の体を肩に担いで走りだした。

『..... k m s h t y 死 k w t な』

この喋り方からして父親だろう。
走る。走りにくい川原の上を、少しでも遠くに逃げるために、走
る。

視界が戻ってくると母が並走しているのが見えた。まだ妹は気絶
しているようだった。

その、後ろ。

母が走る、かなり後方。二〇〇メートルも三〇〇メートルも離れ
ていそうなのに、その巨大さは圧巻の一言。

少年はその姿を見たことがある。

実際に見れるようなものではないが、たしかに、そして誰もが見
たことがある生き物だった。

しかし、それにしても形が醜い。

その生物は、辺りの人間を吹き飛ばして、蹴散らして、喰い散ら
す。腸が引きずり出されて、頭蓋骨はあっさりと噛み砕かれ、ドロ
ドロとした脳漿が噴き出る。

絞り出される声は全て悲鳴。創りだされるのは全て地獄。

まるで戦車が人間を無造作に轢き殺していくかのように、人間が
ただの肉の塊になっていく。

逃げようとした者は、時にはその強靱な尻尾で打たれ胴体と下半
身が真っ二つになり、時には上げる咆哮で鼓膜を破られ、時には巨
大な翼が起こす烈風で数十メートルも上空に投げ飛ばされ
時には口から放たれる業火によって灰になった。

それをぼんやりとした目で眺めていた少年は、その生物と目が合
う。淡黄色の宝石のような瞳は少年たち家族を見つけると、巨大な
翼を使い宙を舞った。

逃げることなどできない。

相手は、伝説の生き物、竜なのだから。

しかし、少年は確信していた。

正義の味方が現れて、自分達を守るために命を賭して戦ってくれると。

本当はあの竜は悪竜なんかじゃなくて、悪人だけを殺す正義の味方なんだと。

自分が生き残ることは大前提で考えて、家族全員でまた笑って暮らせるような罅が訪れるのを疑いもしなかった。

轟ッ！！ と頭上で烈風が吹き荒れる。

走っている父と母は思わず足をとられそうになるが、それでも走り続けた。

少年はこう考えていた。

もしかしたら、父と母も自分と同じように正義の味方の登場を待っているのではないのかと。

上空で大気を吸い込む音がした。

次の瞬間、轟ッ！！ と大気を喰らう炎の叫びが聞こえた。

目の前の川原に敷き詰められている石が、一瞬でドロドロのオレンジ色に溶けた。

父と母は喉が焼けるような熱風を受けながら、それでも怯まず走り続けた。

そうして少年と妹は宙を舞った。

え？ と疑問の表情を浮かべる少年。数瞬後、体全身が水に包まれるのを感じた。

意識を失っている妹が危ないと思い、少年は急な流れに逆らいながら少し離れたところに浮かんでいる妹のもとへ泳いだ。

ふと、両親の方を見てみる。

そこにはいつものように寡黙な父と柔和な笑みを浮かべる母が立っていた。

彼らの後ろには大きな口を開けた竜が見える。

何をしてるの！？ という叫び声は出なかった。

あの寡黙な父が、ほんの少しだけ表情を緩ませた。

『黒羽、紅葉。　　生きるッ！』

あの柔和な母が少し怒ったような顔をした。

『妹を泣かせるんじゃないのよ？　女の子を守るのは男の子の役目なんだから！』

少年は流れの速い川に逆らうようにして、妹を抱えたまま一生懸命に泳ぐ。

不思議と息は上がらないし、全く疲れない。

それでも、いくら頑張っても、流されていく。

ガボガボと水を飲み込むが、それでも諦めなかった。

（正義の味方は？　やめろドラゴン！　なんで、なんでやめないんだよオツ！！）

少年の幻想など、妄想以下の塵芥にしかならず、現実を突き付けられて消え去った。

大きく広げられるナイフのような歯がずらりと並んだ口。

『お、おか、おとツ！？　あ、アアアアアアアアアアアアアアアアアッ！？』

そして、そしてそしてそして　　。

この物語は、単純明快な服従関係で構成されている。
守る者と、守られる者との、世界を守るためのお話。

られていたが。

公園で筋トレでもするかーっ！ と気持ちの良い叫びを上げて公園に入ると、なんだか人だからできていないか。何かかと思いついてその中心部分を見る。

小さな少女がレジ袋を持ったままプルプルと震えていたのだ。

それを見て下卑た笑みを浮かべる二〇人弱のガラの悪そうな少年たち。

彼の好きなタイプは笑顔な女の子である。

Q ーここから少年がとる行動は？

A ー近くにあった消火器片手に突撃。

ぼわぼわわん、という擬音とともに現実世界に戻ってきた黒羽。

後ろからは相も変わらず野太い声が上がっている。

お姫様抱っこで小さな体をさらに小さくしている茶髪の少女。清楚な空色系のワンピースは何だかよく似合っていた。

「う、う、うう、ご、ごめんなさあいつ！？ 肩ぶつかっちゃって

ごめんなさあいつ！？」

「さ、最近の若者はい、いかな！ それぐらいのことでキレてしまつのかーっ！？」

死ねロリコン！ と叫びつつ、小さな少女の触り心地って結構いいかもしれない……と思っている黒羽。

自己嫌悪に浸りながら、春の爽やかな道路を駆け抜ける。

どうやら、長い散歩になりそうだ。

東京都というのは日本の都心だ。大抵のものは手に入るし、大体

の欲望は叶えられる。

そんな人間の欲望と比例するように肥大化した雑居ビルの間をすり抜けるように走り抜ける一つとなった影。走り抜けると言っても、絶影と言っただけではないが。

路地裏をあちこち駆け巡り、ときには民家の敷地に侵入し、ときにはゴミ箱の影に隠れ、ときには立てかけてあった資材などを蹴り倒してガラの悪い少年たちを巻いていた。

一時間。一日の二四分の一の間逃げた。にもかかわらず、少年は息一つ切らしていない。むしろ清々しいと言った表情だ。

「いやー、久々に全力疾走したけどやっぱり疲れないな。なんでだろ？ ……まあ、不便じゃないからいいんだけど」

どうやら黒羽自身、自分の体のことはほとんど分かっていないようだった。

ま、いつか、と軽く息を吐くと、腕の中にある小さな少女に、出来るだけ優しい声で話しかける。

「大丈夫？」

「う、う、ううううううう、うわああああんっ！？」

いきなり泣き出した少女に、のおっ！？ と驚いた。

が、優しげに目を細めると、ポンっとさらさらした艶のある髪の毛を撫でた。

少女は、「ふえ？」と素っ頓狂な声を上げると黒羽の顔を見上げた。

黒羽からするとその上目遣い＋涙目という一撃必殺完成武器だったのだが、撫でるだけで我慢しておく。「カワイー！ お家でご賞味イ！」と言えば自宅にいる妹に挽肉にされた拳句、最高画質ビデオカメラにそのあられもない姿を録画され、観賞用、実用、保存用の三つに肉片を分けるだろうことは分かりきっているし、そんなこととはしない。

そんなこんなで、しばらくすると黒羽はゆっくりと口を開く。

「さてと。君のお家はどこかな？」

ともすれば勘違いされそうな言葉を吐きながら、にっこりと一層の笑みを深めた。

暖かな陽光が胸にかけてあるクロムメタルのニヒルに輝くペンダントが彼女の網膜に優しく映った。

第一章 3節・4節

3

東京都渋谷駅前のスクランブル交差点では、人がありの巢に水を流し込んだときの蟻のようにワラワラと湧いて出てきていた。スクランブル交差点とは言ってみれば大規模な歩車分離式横断歩道のことで、利点とともに渋滞を招くという欠点も存在するが、まあ日本の文化みたいになっている。

そんなスクランブル交差点を通る人の群れの中に携帯電話を耳に当てながら歩く金髪の女性が居た。それ自体は珍しいどころか当たり前なので上手く風景に溶け込めていた。

腰までの長さの金髪、それによく映える碧眼。女性にしてはかなりの高身長で一七〇センチメートルはあるだろう。抜群のプロモーションでモデルと言われればそこまでで、ハリウッド女優と言われれば信じてしまうだろう。

まだ肌寒いのか白系の薄めのコートを着ていた。そこから伸びる右手の手首には黒い腕輪がはめられている。

『メルディ。極東の島国の居心地はどうかかな?』

通話相手は年若い男性の声だった。

金髪の少女メルディは適当に髪を掻き上げながら、少し面倒くさそうに言った。

「いい所なんじゃない? 人は綺麗好きだし、食べ物は美味しいし、大体の物はあるし、なんとと言ってもこの平和な空気がいいわね」

流暢な日本語で語るメルディ。

それに対して通話相手の男は、

『まあ、それが表面上だけというのに気付いていないのは少し滑稽だがな』

少しだけ含みを混ぜた笑いを上げながら、通話相手の男は話を続ける。

『笑えるだろう？ あの『最強』はその国出身なんだ。あの、対戦車ミサイルを雨のように浴びてもケロつとした顔で帰ってくるような奴が、その国出身なんだ』

メルディは呆れたような顔をして、

「それこそ人種差別の考え方よ。どの国がどうか、そんな些末なことは最終的には関係ないの。強い奴が上に立つ。弱い奴が謙る。そんなモンなのよ」

『だから、メルディは弱い奴が組み伏せられるのを守るために頑張るってか？』

「違うわ」

何の迷いも無く答えたメルディ。

「またも面倒くさそうに艶のある金髪をばっさばっさと掻きながら、生きるために戦うの。その過程で誰が助かるうが知ったこっちゃないの」

『ふうん。ようするにメルディはツンデレってわけでいいんだな』

「それ以上くだらなないことぬかしたらアンタの男の象徴を引き千切つていらねーことばっか喋りやがる口に捻じ込むわよ？」

ぞくり、と背中に冷たいものを感じながら通話相手は慎重に言葉を選ぶことにした。

『今回の任務なんだが、』

「『適合者』と思われる少年との接触。そうでしょ？」

そんなことは知っているからさっさと先を話せ、と言外に言っていた。

こんなところで彼女の機嫌を損ねてしまっても馬鹿らしいのでふざけず事務的なやり取りをする。

『そうだな。機関も大忙しだし、少しでも人手が欲しいんだらうぜ。バカみたいだよな。いくら武器を持っているとは言っても、それが民間人なんか何の訓練もなしに使えるわけもないのに』

例えば、拳銃を持っているとする。日本刀でもいいだろう。

それを馬鹿らしいことだが、知らないだけであなたはそれを持っている、と言われるとする。言われた人物はどうなるだろうか。恐らく、手足がガクガクと震えてその場にへたり込むことしかできないだろう。

力とは、その本質を理解し、幾度も経験し研磨してから、初めて正常に使えるものだ。

よほどの精神異常者か、世紀の大馬鹿者でなければ軽々しく振るうことなんかできない。

しかし、世界はそんなことを言っていられないほどに困窮しているような口調で通話相手の男は語る。

「『適合試験』はどうするの？ 失敗したら肉塊になるか廃人になるかのどちらかよ」

『もうひとつ、選択肢があるだろ？』

「……『隷属化』のこと？」

『メルデイサマには、少々荷が重いか？』

メルデイの機嫌を左右するような言葉。

この言葉が悪い方に作用すれば、今からでも任務をぶつちぎって彼女はイギリスにいる通話相手を殺しにかかるだろう。

逆に良い方に作用すれば、自尊心の高い彼女は意気揚々と任務を遂行するだろう。

通話相手の喉がゴクリと鳴る。

「冗談でしょう？ 私的には、『悪魔でも強法的』に体のいい奴隷が手に入るんだから万々歳よ。悪魔でも、ね？」

男の博打は成功した。

しかし、先ほどより喉が急激に渴くのを感じた。

「それで？ 他に報告とかないんだったらシヨッピングとかを楽しみたいんだけど？」

そんなことを気に留めることすらしないメルデイ。「日本円に替えたわよね」とかいいながらブランド物の財布の中身を確認する。

通りすがりのエキストラAがその札束の枚数に目を丸くしていたのはどうでもいいことだ。

通話相手の男は今思い出したというように慌てて、
『東京に数体の『邪神』の反応が見られる。それに『裏切り者』たちも最近は続出している。気をつけるよ？ 一体だけかなり強力なのが居た。その周辺にも機関の構成員はいるが、相変わらずのクソ野郎だ。あてにしないほうがいい』

『邪神』という言葉に少しだけ反応したメルディだったが通話相手の男は気付かない。

彼女は一つだけ息を吐くと興味がないと言ったように、

「私が、いつ、誰を、どんなふうにあてにしたのかしら？」スクラブル交差点をゆっくりとした足取りで進みながら、「私は、いつでも、誰にも、どんなふうにもあてにしないわ」

『……もう少し人を頼ることを覚えないと、死ぬぞ？』

「死なないわよ。そろそろショッピングの時間だし、切るわね。じや」

通話終了のボタンを押し携帯電話を閉じるとポケットの中に入った。
込んだ。

笑えない。

誰かを頼るだなんて、笑えない。

少女は点滅しだした歩行者信号を見ながら、人の群れとともに渋谷の街に消えていった。

4

先程まで黒羽達が居た板橋区から電車で揺られること十数分。

色々な苦難（不良にからまれたり不良にからまれたり）を乗り越え、やっとのことで少女が住んでいるという高級住宅街のある千代田区に着いた。

少女の案内で着いて行った先には、

「うばあ……。で、でかいな」

胸ではない。少女の平坦な胸を見るにそれだけはあり得なかった。簡単に言えば豪邸である。難しく言っても豪邸である。どこのホワイトハウスだと言いたくなるような真っ白な館。東京のどこにこんな土地があったんだと問いただしたくなるような広大な庭。

茶髪の少女は空色のワンピースの端をレジ袋を持っていないほうの手でぎゅっと握りしめながら、

「こ、ここでメイドとして働かせていただいているんです。中学生なので朝と夕方からじゃないと無理なんですけど……」

一応中学生なんだ、という反応は出てこなかった。

「……………」

黒羽は、ただただ思ったという。

本当にメイドっていたんだな、と。

茶髪の小柄な女の子を見る。上から下までじっくりと。

茶髪と同じ栗色の瞳。どこまでも平坦な、まるで大平原を連想させるような慎ましい胸。見た目は十二歳ほどで、少女の中学生という証言にギリギリ合致する（それでも胸が小さい）。

あの少年たちは本物の真正なロリコンだったらしい。

豪邸に視線を戻してぼーっとしている自分に対して、「あり、ありがとうございましてありがとうございまして、」あり、ありがとうございました！」とペコペコ頭を下げ続ける少女に、

「そういえば、なんだ君は板橋まで来てたの？」

「えと、そ、それは……、ッ！？」

「？」

茶髪の少女が黒羽の方を見て驚愕の顔をした。

いや、正確には黒羽ではない。黒羽の後ろの方を凝視している。なんだろう？　と思いつつくりと後ろを振り向く。

男が居た。

豪華な黒の礼服を着て縁の細い眼鏡をかけた黒髪の男だった。見るからに不機嫌そうな顔で黒羽に一言、

「……なんだ、キサマ」

「うえ、え、え、えっと」

いきなりスゴまれて言い淀む黒羽。ボディランゲージを駆使しようとしたが相手は日本人のようなので却下。英語も同上で却下。イタリア語ロシア語フランス語ドイツ語は知らないので却下。

日本語で切り返そうと思ったが、『なんだ、キサマ』と聞かれて『相寄黒羽十六歳。今年で高校二年生になるピチピチ男子高校生』と切り返せばいいわけではないだろう。

ようするにこの場での『なんだ、キサマ』は、『キサマ何者』ではなく『キサマは何でオレの前にたつてやがる』ということなのだろう。

実際、敵意の視線がバシバシ体に叩きつけられている。

そのとき茶髪の少女が、

「ご、ご主人様。そ、その、私のことを、不良から助けてくださった方なのです」

そこで、少女の御主人さまとやらの雰囲気さがらりと変わる。

いや、その表現は正しくない。

雰囲気一度ゼロにして、そこからまったく別のものにすり替えたかのような。

「……千秋、キサマ」

細眼鏡の男は千秋と呼ばれた少女の細い腕を掴み、強引に屋敷の中に連れて行くこうとする。

「オ、オイ！」黒羽は驚いたような声を上げて、「女の子はもっと丁寧に扱えよ！」

「……キサマ、俺に口答えする気か？」

空気が、目の前の優男に支配される。この場の王は俺だと言いたいように、男はこの場の空気を握り潰す。

だが。

黒羽はちよつとばかり汗ばんだ手の平を握りしめ拳を作る。喧嘩しかしたことの無い脆い拳だ。

「……するよ。その娘が辛そうな顔してるんだ。もっと丁寧に扱え
ロリコン」

「死ね、格下」

あ。死ぬな、と思った。

法律で守られているから云々なんて、所詮紙面上のお約束事のようにちつぽけに感じるほどの圧倒的殺意。

間違いない。

目の前の男は人の皮を被った化物だ。化けの皮がなじんだ人間だ。恐らく、黒羽とは違う世界に住んでいる人間だということは感覚的に把握できた。

自分たちが住んでいる世界は所詮表だということは誰もが理解している。だけど、そんな表の世界に裏の奴が混じっているこの違和感。感じたことが無い。

そのとき、腰を抜かしかけた黒羽を守るように千秋と呼ばれた少女は男の間に割り込んだ。

「ご、ご主人様！ ば、罰ならいくらでもお受けいたします。い、怒りを才沈めください！」

「……フン」

すると、細眼鏡の男の殺意が和らいでいく。そして、嗜虐的な笑みを浮かべて、「さっさと行くぞ」と千秋の腕を掴んで屋敷の中に入ろうとする。

「 待てよ」

黒羽は、助けられた命を棒に振った。魑魅魍魎相手に会話を試みた。

それを、人間は無謀という。

「罰って、なんだよ。そんな小さな子供に、何する気だよ」

「キサマには、関係の無いことだ」

「関係があるかないか。そっちの方が関係ない」

奥歯を噛みしめながら、黒羽は細眼鏡の男を睨みつける。

すると、細眼鏡の男は呆れたように息を吐くと、

「なにもしない。だから、キサマはさっさと帰れ」

あっさりと、細眼鏡の男は言った。

嘘には、聞こえない。

千秋の方を見るが、顔を横に振って、目で『早く帰れ』と促しているようだった。

当人がこうした反応を示している以上、本当になにもしないのだろつ。

黒羽はさらに奥歯に力を入れて、最後の悪あがきと言ったように、「辛いことされたら、板橋にある『ポートフィリア』ってマンションまで来て。……じゃ」

自分の所在地を彼女に教えて、胸糞悪い気分を我慢しながらその場を後にした。

そのあと、彼女は本当になにもされなかったという。……なにも。

第一章 5節・6節

5

黒羽は、なんだかやるせない気持ちになりながら自宅に引き返した。

電車でガタゴトと十数分揺られ続け、ぼーっとした表情で降りる。今は昼休みなので学生の姿が乏しい学校の前を通りながら、青春している野球部の掛け声が耳に入った。いつもは感心するものだが、今だけはとても耳障りに感じる。

「……クソ。なんなんだよ、一体。あの男はどう言ったアレなんだ？ 本当に、本当になにもされないのか？ クソ……」

疑問が疑念を生み、疑念が苛立ちを生んだ。

適当に転がっていた小石を思いっきり蹴とばす。

本当に、ぱっとしない一日が始まった。

しかし、ここである一つの問題を思い出した。

(……あ。紅葉に外出るって言っただけ。……マズいぞ、非常にマズい。早く帰りつもりだったから、つい忘れてた)

マンションに二人で一緒に住んでいる妹のことを思い出しながら肩を震わせる。

黒羽自体はそこそこ体を鍛えている方だと思う。鍛えなくても何故だか運動能力はずば抜けているのだが気分的に鍛えている。

それでも、あの妹が相手となると一方的に蹂躪されてしまうのだ。遊びで包丁を時速一二〇キロで投擲してくる妹は世の中そうそういないだろう。遊びだからと言って本気で肩の関節を外しに来る妹はいないだろう。遊びだからと言って釘バットを振り回して特攻をかけてくる妹などいないだろう。

憂鬱になりながら妹が待っているであろう『ポर्टフィリア』の

目に入るのが橙色の長髪。同じく橙色の瞳。気の強そうな顔つきで、実際にんまりと笑顔を浮かべている裏には猛烈な怒気が感じ取れていた。

服装も橙色のジャージで、美人が台無しだった。胸の方はまだまだ発育途上と言ったところだが、ジャージの上からも結構分かるほどはある。

「いや、小さな少女を不良グループ二〇名ほどから小一時間守りながら逃げきって、そのあと千代田区の豪邸まで送り届けた後魍魎魍魎の細眼鏡の男と喧嘩しそうになって、」

「いや、もういい。とりあえず、メシ食え」

そう言いながらリビングの机の上にあるラップしたチャーハンを指差す。

「あ、ありが」

感謝の言葉を伝えようとした黒羽は紅葉の表情を見て固まった。

ニタリ、と邪悪な笑みを浮かべているではないか。

「オシオキは、その後な」

別にえっちいことをするわけではない。それこそ禁断だ。

思わず玄関の方に踵を返して逃げそうになるがガチャリと鍵の閉まる音を聞いて絶望した。

その張本人の顔を見やる。

「許して」

「いやだ」

美味しくチャーハンを頂いたが、心なしか少しだけしょっぱく感じたのは気のせいだったのだろうか。人はそれを心の汗というらしい。

行儀よく両手を合わせ、「ごちそうさまでした」というと後ろから、「オソマツサマデシタ」と嬉しそうな声が聞こえる。

完食されたのが嬉しいわけではない。

これから出来ることが嬉しいのだ。

「ヨシヨシ、じゃ、やるーか？」

「ひ、卑猥な発言禁止！ お隣さんとかに勘違いイッ！？」

プロレスごっこ（本気）である。

座っていた黒羽相手に一気に接近した紅葉が彼の目に指を押し付けアイクロー。試合では五秒で反則をとられるが、ここはワクセンの中ではないので無限に持続可能だ。

「いいいいいいいい！ も、もみじちゃん！？ おにーちゃん
の目が潰れちゃうかもしれないイイイイッ！」

「だったらア！ なんていっつもいっつもアタシになにも言わずに
どっか行っちゃうのかなアアアア？」

「い、急ぎの用事だったか」

「朝のキモチイイ陽気の上で散歩するのが急ぎの用事かー、へー」
アイクローから右腕をアームロック。ギシギシと黒羽の関節が嫌な悲鳴を上げた。

「きよ、今日はいつになく怒ってらっしやるーっ！」

「でさー、どんな女の子だったわけ？ 小さな少女って言うぐらい
だから、小学生か？ ロリコンアニキ」

「ちゅ、中学生でございますっ！ 中学一年生か二年生でございますっ！」

「ほー、アタシと同じねー」

「も、紅葉は卒業しただろうが！ お、お願い許して！ おにーさまの右肩の関節がイヤイヤ言っつて悲鳴を上げてらっしやるから！」

「分かった分かった。分かったから今度なんか買ってくれよ」

解放された瞬間にそんなことを言われ両手両膝をフローリングにつけてうなだれた。

財布を中身を確認するまでも無い。

諭吉さんが一人だけいる。野口さんも樋口さんもいない。守礼門なんて論外だった。

両親が居ないこの兄妹にとって自然と黒羽が財布の緒を締めるこ

とになる。一か月のお小遣いは一万円。譲歩はしない。

奨学金と生活保護とアルバイトを駆使して生きながらえている状態だった。

このマンションも本当は家賃十万ぐらいはかかるらしいのだが、この大家さんが両親と知り合いだったらしく二人のことを不憚に思って一万円にしてくれていた。人間って捨てたもんじゃない。

そんなこんなで不自由はなく暮らしている。のだが、今時の女の子と言うのはお金がかかるらしい。服だとかメイクだとかアクセサリーだとか携帯代だとか、結構馬鹿にならなかった。

「いーだろーねーアニキー買って買ってー」

わざと胸を押し付けてくる紅葉。ジャージというのがまたなんともギヤップがあり云々と考えている内に、「わ、分かったから離れようー！」と叫んでしまった黒羽。

ハッ!? と気付いた時には既に遅かった。

ワイワイやってる紅葉の横で勝手にうなだれた黒羽。

「アニキもついてくるんだぞ? 分かったな?」

「あいあい。分かりましたー」

「むう、気の無い返事はダメだ。もっと嬉しそうに!」

「やつほオオオ! 紅葉と買い物嬉しいなああああッ!」

ほぼやけくそ気味に叫んだ黒羽。

今後数日間、近隣住民から『シスコン』と揶揄されるとも知らずに。

「あいしてるぜアニキー」

「いもうとよー」

やる気のないかけ合いをしながら、ふとカレンダーの方を見ている。

四月一日のところに、大きく二重丸がつけてある。これは黒羽がつけたものではない。この役目は紅葉のもの。

今日は三月二十五日だから、あと一週間と言ったところか。

「……そっか。もうすぐ、なんだな」

「その日は開けとけよな」
「分かってるって。さーてと、今から何しようかなー」
「一緒にゲームしようぜ！ いやー、ラグナロクが倒せなくてさ」
「あれねー？ いいのかなーおにーちゃんに頼っちゃってー？ 紅葉の出番はないと思いなさい！」

四月一日。両親が、死んだ日。

6

東京都新宿区。

金髪碧眼の美少女メルデイはそんなところまで来ていた。両手にはどっさり衣服類の入った紙袋が握られている。

「いい買い物したわね。ホント、日本って最高」
心にもないことを言いつつ、若干スキップ交じりで新宿の街並みを歩く。

彼女の『機関』から言い渡された任務は、とある少年と接触し、『適合試験』を行うか『隷属化』を行え、というものだった。

『適合試験』は素質がなければ間違いなく廃人が肉片になるだろう。

『隷属化』はそれを行う人の素質が問題である。一人を自分のもとに平伏せさせるわけなのだから、王者の資格のようなものが必要だ。要はカリスマだ。

とある少年は七年前のある事件から生き残った人物らしい。あの事件はメルデイたちの間でもかなり有名だ。あの日から、より多くの『邪神』たちが現れ始めたのだから。

とある少年はその事件から生還した妹と二人で生活しているらしい。傍から見ても仲の良い兄妹で、両親が居ないにも拘らず周囲の人物に支えられながらある程度幸せに生きているらしい。

彼女は、そんな彼の幸せな生活を奪うというのだ。

戦場に赴け、という最悪の命令とともに。

ある程度シヨツピングも楽しんだ。今から、仕事の時間である。
と。

「その前に、雑魚が数匹いるようね」

彼女の後ろから異形の何かが現れた。

彼女たちは、突如現れたその異形たちのことを総称してこう呼ぶ。

『邪神』と。

幸い周囲には人が居ない。路地裏のようだった。

そんな薄暗い空間に人型の白濁した何かが三体、彼女の後ろに現れた。

細かい説明など不要だろう。

彼女は両手に持っていた衣服が入っていた紙袋をポサリと地面に置く。

彼女は腕にはめてあるクロムメタルのような金属で作られた腕輪に目をやる。

「ま、肩慣らしてるところかしらね？」

「ギユガッ」

「ゴウウゴッ」

「ボギユウウッ」

細かい説明など不要だろう。

今から行われるのは、もっとも単純な生命競争。

所謂、殺し合いだ。

両者は睨み合う。

空はオレンジ色から紫色に染まりつつある。

日が差し込まない薄暗い路地裏に、新たな色が撒き散らされようとしていた。

瞬間、両者はぶつかり合った。

「薄暗い路地裏に、真っ赤な鮮血が撒き散らされた。
シンクロ
同調率、一〇パーセント」

第一章 5節・6節（後書き）

ご感想ご批判ご指摘、お待ちしております。

第一章 7節(前書き)

7節が少々長くなったので、
では、とじょうぞ。

第一章 7節

7

春と言っても、夜はまだまだ冷え込む。そう言いながら厚着をしすぎる逆に暑くなってしまふので薄着のコートを着ていた。

黒羽と紅葉の二人は外食に出かけていた。

あんまり高い所はいけないので大型チェーン店のファミレスだ。

二時間ほど食べたりに飲んだり喋ったり。本当に充実した時間を迎えられたと思う。

ちよつとしたトラブルもあつたが、まあ、それもいい思い出になることだろう。

「そんなに恋人に見えんのかなあ？ 傍から見れば」

紅葉が電線によつて四角く切り取られた夜空を見上げながらそんなことを言う。

そう。ファミレスの店員から、『仲の良い恋人同士ですね』などと言われて珍しく紅葉が慌てたのが今回のトラブルだった。恥ずかしさのあまり肘を固められるアームロックをかけられて黒羽の切ない悲鳴が店内に響き渡つたのだが。

そう言われれば、見えないことも無いかもしれない。

「んー？ まあ、あんまり似てない兄妹だからね。仲よくしてたらそう見えても仕方がないんじゃないか？」

「あ、アニキが、まともなことを言っているだと……？」

一歩だけ後ろに下がりながらわなわなしている紅葉。

「紅葉の中での僕の評価ってどうなつてんのっ！？」

「ロリコンシスコン変態野郎」

ケロつとした表情でキツパリ言い放つた紅葉。

あまりにも普通に言われたので、「あ、そうなんだ」と納得しか

けた黒羽だった。だがその全てが自分に当てはまらないということを知ると、

「まあ待て。僕がいつ紅葉に対してシスコンぶりを見せた？」

「いつも」

「またも当たり前のように言い放った紅葉に、「あ、そっか」と納得しかけた黒羽だが、やっぱりそれも当てはまらないと思い抗議の声を上げる。

「いつもとはなんだいつもとはーっ!」

「小学校四年生の時、六年生の女子に囲まれてたところを救助。同年十月。運動会のリレーで自作で応援用の旗を作成。同日、アタシがこけて膝を擦り剥くと凄惨な形相で保健室へ連れていく。中学二年生。アニキと同級生の男に嫌がらせをされていると知ると一撃で男を粉砕。以後アタシとの接触を禁じる。アタシが足を突っ込みかけた不良グループから抜けようとして失敗しそうになった時、鉄パイプ片手に特攻。グループを壊滅させる……。で？ どこがシスコンじゃないんだ？」

「これぐらいはまだまだ序の口だぞ、と言いたいような顔で黒羽に尋ねる紅葉。

「しかし黒羽はケロっとした顔で、

「え？ 普通じゃん。妹が危機的状況にあるのに、兄が立ち上がりずしてどうする」

「その思考形態がすでにシスコンだって言うんだよ！」

「あ、なるほど」

手の平に逆の手でポンっと手を置くと、そうだったのかそうだったのかと理解する。どうやら天然モノのシスターコンプレックスだったらしい。あながちロリコンのことを揶揄できない立場だった。した。

「……………まあ、嬉しいからいいんだけど」

「ボソボソゴニョゴニョと何かを呟く紅葉。

「うん？ 何がいいんだ？」

「……クク。何でもねえよバカアニキ」

背後から一気に近寄り左手で黒羽の右手首を前方に取り、右肘に右手を差し入れるようにして抱え上げ、ブリッジで後方に反り投げで固める変形ジャーマンスープレックス。

「なにすひでぶツ!？」

アスファルトって、意外と痛かったりする。

視界がグルリと回った後鋭い衝撃が後頭部を襲った。間違いない、今自分の頭の上には星かひよこがクルクル回っている。

血が流れなかったのが奇跡と言えるだろう。これが噂のギャグ補正か、とかいいつつ黒羽は体を起こした。

そして、

「そりゃあ!」

「なにすんびゃあああああああああアツ!？」

紅葉の両足を脇に抱えてその場で高速回転するクレハハリケーン

(今命名)。別名、黒羽復讐クレハリベンジを決意。

軸がぶれることなくどんどん加速していく。

ビュンビュンビュンビュンッ! と風を切る音が心地いいのだが、

紅葉の絶叫があたりに響き渡っている。

「アアアアアニイイイキイイイイイツ! 悪かったかりゃあ

あああああ!」

「はっはっはあ! 最初からそう言えばよいのだア!」

こんな風に、黒羽が大人げなく本気を出すと優劣が一気に逆転してしまうのを理解しているので、黒羽はいつも手加減している。それを紅葉も分かっているので心置きなく本気で遊ぶことができるのだが。

そのとき、黒羽がアスファルトの凹凸に足をとられ軸が一気にぶれる。

ぐるん、と体勢を崩した黒羽は立て直そうとして腕の力を抜いてしまっ。

スポツ、と紅葉の両足が脇から外れ空高く舞った。

一瞬、何が起こったのか分からなかった紅葉だったが民家の二階と同じ目線の高さにあるのに気付き、状況を把握する。

地球にはいつでも一定の力が働いている。

重力という、とても重要なものだ。いつもなら人間を地球表面上に張り付けてくれていた力があるのだが、それが一定以上の高さからかかると一気に凶器と化す。

ようするに、上昇の後には落下がつきものだ。

運動エネルギーと位置エネルギーが一瞬だけ釣り合い、全ての力から解放され、妙な浮遊感を覚える紅葉。

そして、落下が始まる。

叫び言葉はただ一つ。

「こんのクソアニキがアアアアアアアアアアアアアアアアアッ！」

黒羽は早々に体勢を立て直し上空を見つめていた。

「たーまやー、みたいな感じですか。いやー、冬に花火とは乙なモンですなー」

いつも通りマイペースに、それでいて若干現実逃避をしながら受け止める態勢に入る。

普通に何のクッションも入れずに受け止めたら完全に腕が折れるだろう。

頑張れ僕！ といつ衝撃が来てもいいように身構える。

悲鳴を上げて落下してくる紅葉をしつかりふんわり受け止めた。

若干腕は痛んだが、なんとか成功したようだ。

黒羽の腕の中では、ゼーはーゼーはと息を切らしている妹の姿がある。所謂お姫様抱っこという奴だった。

「いやー、ごめンンンンッ!?」

「クソバカアニキッ！ あ、アタシを殺す気か！」

若干涙目になりながら正拳を顔面に繰り出した紅葉。錯覚だろうが近くにいた猫はたしかに少年の顔面が陥没するのを見たという。流石の野良猫も驚いたのか、うにゃーっ！と叫び声を上げて逃げてしまった。

「ひゃ、わらとれはないねす」

さつさと紅葉を下ろして凹んだ顔を押さえる。血が出ていないのもどうやらギャグ補正がかかっているらしかった。

顔の形が元に戻ったところでようやく帰路につく二人。

電線によって四角く切り取られた夜空は、それはそれで結構綺麗だった。

最初はブンブン怒っていた紅葉だったが、時間とともに落ち着いて行った。

話題は一週間後のお墓参りのことになった。

「墓参り墓参りっていうけどさー、なんで川原に行くんだ？」

「遺骨を灰にして川に流したからだよー」

「また嘘言ってるやがるなッ！　っつーか、そんなことしたら警察に捕まんだろっが！　アタシだってそんな危ない橋は渡んねえのにアニキが渡れるはずねえだろ！」

「結構酷いこと言ってますね？　僕としてはそこところが結構傷つくのでありますが」

「酷くない。アニキの方が、酷いじゃねえか。アタシに本当のこと何にも言ってくれないしさ。いい加減、アタシも子供じゃないんだしさー、教えてくれたっていいじゃねえかよ」

「保護者の視点から見れば子供はいつまでも子供だよ。それに嘘は言っていないって。全部妄想だから。僕の頭の中ではそれが正しいことになってんの」

「……フン。来年こそは絶対に聞きだしてやんだからな！　覚えてるよクソアニキ」

「僕のテスト見たこと無いのか？　それぐらい造作もないことだ」

「アタシよりはいいと言っても、精々偏差値五五ぐらいじゃねえか。」

悲観することは無いけど威張るほどのことでも無いぞ」

「はっはっ。まあ、なんだ。いつか教えてあげるよ。いつか、ね」

「教える気がねえな！……そうだ、媚薬で焦らしプレイ、そこで聞きだせば」

「その思考に至るお前は凄いよ」

なんだかんだあーだこーだ、と言い合う二人。

紅葉が言葉巧みに情報を聞き出そうとしているが、それら全てを黒羽が受け流すといった構図だった。

黒羽は彼女に何も言っていない。

紅葉は彼に何も教えてもらっていない。

それでいいと黒羽は思っている。

世の中、知らないほうがいいことだってある。あんなこと知らないほうがいい。そうに決まっている、と黒羽は自分で自分を納得させる。

あの醜い形をした竜に噛み砕かれる両親のことを紅葉に教えて、なにがどうい方向に向かうというのだ。絶対に、そんなことを知ったら、そんなことを思い出したら、紅葉は壊れてしまう。

紅葉は所謂記憶喪失という奴だった。軽度のもので、あの川原に行つた日の前後の記憶が全て飛ぶ程度。医者が言うには『ふとしたきっかけで戻るかもしれない』とのことだったが、

（お母さんと、約束したんだ。守るって……）

妹に降りかかる災厄は全て払いのける。それがどんな些細なことだろうと、絶対に。

周りの人間はシスコンだと揶揄するかもしれないが、それが何だというのだろうか。それで妹が守れるというのなら、別に恥ずべきことではないはずだ。

「お、おい。どうしたんだ？ いきなり神妙な顔して」

色々な思考をしている内に紅葉の顔が目の前にあつた。橙色の瞳が黒羽の顔を覗き込んでいる。

黒羽はすつと橙色の髪の毛に手を伸ばし撫でた。

「な、なにすんだ〜っ」

「ナデナデ」

あわあわとしながら黒羽の胸をポカポカ殴りつけてくるが全く痛く無かった。

大体いつもこんな感じで撒いている。

そして。

大抵はこんな風に、安全に安息に安泰に安寧に終わるはずだった。黒羽と紅葉の視界が黒く翳る。もとからぼんやりとした月の光と街灯の白色電灯しかなかったのだ。それが失われて真っ暗になる。

「ッ!?」

黒羽は紅葉を強引に引き寄せて全力で走った。紅葉が何かを言っているがそれどころではない。

黒羽は、この感覚を知っていた。

人の安全を、安息を、安泰を、安寧を、突然現れて横から全てを奪い去るこの感覚を。

ズズンッ！ という音を放ちアスファルトの破片を飛び散らせながら、よく知る醜いソレは姿を現した。

知っている。形は違うが知っている。

覚えている。忘れられるはずがない。

誓っている。アレから紅葉を守ると。

「ギユガツギユガツ」

なんとか人の形を留めているが、白濁したその巨大な体躯。三メートルは間違いなくあるだろう。顔面はのっぺりとしていて、それでいて黒い目と鋭く裂かれた口がある。

化物。人の形をした化物だ。

思い出すのは朝の細眼鏡の男。

しかし、それともまた違った感覚だ。

だが、同一に感じるのは、圧倒的死の気配。突きつけられるその

死の恐怖。

気付けば肩が小刻みに震えている。紅葉を抱き寄せている腕により一層の強張りが入る。恐怖で笑う膝をなんとか立たせながら、黒羽はソレを睨みつけた。

ズグズグとした憎悪が漏れだす。殺せるものならば殺してやりたいほどに。その網膜に焼きつけてやりたいほどに。

だが。

「あ、にき？ あ、れは」

「ッ!？」

慌てて紅葉の視界を塞いだ。耳も出来るだけ塞ぎ全てを遮断しようとする。

その行為に抵抗する反応が無い。

医者言葉をもう一度思い出した。

『ふとしたきっかけで戻るかもしれない』という言葉。

負けていた。

既に、目の前にいる化物の姿を見せた時点で、負けていたのだ。

いくら。

いくら、こんな主人公になれない落ちこぼれのモブキャラが誓ったところで。

いくら、不良やあらゆる災厄から手元に残った最後の宝物を守ろうとしたって。

いくら、過去のことを糧にして目の前の化物を憎悪したって。

一度負けたら、負けなのだ。

直後、紅葉が絶叫する。

「ひ、ア、アあ。お、おかーさ、おとーさ！ アニき、だめ、しぬ、くわれる、いや、だ、にげて、にげてにげてにげてにげてにげてにげて！ イヤ、こないで、やめろ！ ア、アア、アア！ ああああ

ああああああああああああああああああああああああああああ

あッ!？」

腕の中で絶叫する紅葉に呼応するように、

「ギユガアアアアアアアアアアアッ!」

化物も汚らしい口を最大限に広げて咆哮した。

状況は、絶望的だ。

紅葉は壊れかけた。

一発で負け切った。

相手は人外の化物。

忘れられない暴力。

殺すことができない無力。

逃げることができないだろう恐怖。

都合良く現れる主人公などいない。

神様の奇跡などあるはずがない。

状況は、絶望的だ。

しかし。

「……………大丈夫だ、紅葉。お兄ちゃんが守ってやる」

黒羽は笑った。

それは絶望から来る笑いなのかもしれない。

それは何もすることができない自分を馬鹿にする嘲笑なのかもしれない。

れない。

それは都合よく現れてくれる主人公などいない世界を悲観する苦

笑いなのかもしれない。

だが。

彼が守ろうとしたものはこの程度のことですべて諦めてもいいのだろうか。

か。

違うはずだ。

襲い来る絶望の塊には確かに恐怖している。

紅葉は壊れかけている。

一発で負け切っている。

相手は人外の化物だし。

忘れられない暴力は体を震わせる。
殺すことができない無力を嘆いている。
逃げることができないだろう恐怖は笑えてくる。
都合良く現れる主人公などいないのは思い知らされている。
神様の奇跡などあるはずがないのも思い知らされていた。
状況は、絶望的だ。

「そんなことが、僕が紅葉を諦める理由になんて、言いわけになんてなりはしないじゃないか」

その言葉に紅葉の体がぴくんと反応する。

黒羽の腕の中から見上げている。

「アニ、キ……」

「お前のお兄ちゃんは、あんな化物に負けるような腑抜けなお兄ちゃんだったか？」

「……………」

紅葉は黙る。

「お前のお兄ちゃんは、この程度のことでお前を諦めるお兄ちゃんだったか？」

「……………」

紅葉はゆっくりと口を開こうとした。

その寸前、

「お前のお兄ちゃんは、負けると分かっている勝負を諦められる頭の良いお兄ちゃんだったか？」

「うっんっ！」

きっぱりと、否定した。

充分だった。

それだけで、相寄黒羽はおそらくどんなことにも立ち迎えられる。「ギユガギユガッ！」

こちらに向けて気色の悪い雄叫びを上げる化物。今にも襲って来

そうだった。

腕の中で震える紅葉。

「紅葉。立てるか？」

「う、うん」

今まで支えていた紅葉を自分の足で立たせる。

未だ紅葉の瞳に生気は戻らない。これ以上刺激を与えてしまえばそれだけで粉々に吹き飛ぶだろう。

例えば、黒羽が目の前であの化物に壊されたり。

死ぬのは、怖かった。

だが。目の前の震える少女が、涙を流してほしくなかったのも事実だ。

「紅葉。家がどこにあるか分かるな？ あっちだ」

そう言いながら『ポートフィリア』がある方角を指差す黒羽。

彼女はそれを憔悴しきった目で見つめる。

「絶対に振り向くなよ？ お兄ちゃんはその化物倒さないといけな
いから、一緒には行けないけど」

黒羽は、ケロっとした表情で言った。

紅葉は瞳孔が開きかけた瞳で黒羽を見上げるが、反論できないま
でに壊れかけていた。

「出来るな？ お兄ちゃんに、お前がもう子供じゃないって言った
こと、見せてくれ」

紅葉の頭を一つだけ撫でる。

そうして、『ポートフィリア』がある方向に紅葉を向けると背中
を押しながら、「行って」と呟いた。

そこからの紅葉の行動は迅速だった。

一気に加速し、視界から消える。

「……いい子だ」

その直後、待っていたとでも言うように人の形をした化物の巨大
な腕が黒羽のいた場所のアスファルトを粉碎する。

それがあたる直前、黒羽は横に跳んでいた。

そこまで広い通りではない。飛び散ったアスファルトが例外なく黒羽の体も打ち据える。

数度堅いアスファルトの上を転がるとフラフラと立ち上がった。今一度『敵』の姿を視認する。

電線によって四角く切り取られた夜空の下で、文字通りの死闘が始まった。

第一章 7節（後書き）

ご感想ご批判ご指摘、お待ちしております。

第一章 8節・9節(前書き)

なんでしょう。亀展開しか廻には描けないようです。

第一章 8節・9節

8

黒羽の身体能力は異常だ。

特に何をしているわけでもないのに、地面を軽く跳ねただけで垂直に二メートルは飛べるし、いくら走っても疲れないし、五〇メートル走は本気で走ったら測り間違えたと言われる。

不気味だ。そうは思う。

しかし、この場においてその力は十分な性能を発揮していた。

どちらかと言えば、それでも足りないかもしれない。

「ギユガツ！」

三メートルを超える巨体で黒羽を薙ぎ払おうと腕をふるってくる化物。

大気を削り取りながら振るわれた巨腕は一撃食らえば行動不能に陥るのは分かりきっていた。

恐怖で震える体を突き動かし横に跳ぶ。

ドギヤツ！ と鈍い音を放ちアスファルトを軽々と砕くあの巨腕。砕かれたアスファルトが体の至るところにぶつかるが最小限のダメージで済むように避ける。

破壊力が凄まじいのは分かる。一撃でも食らえば危ないのは分かった。

しかし、それはあの化物がこの世界に存在しているということだった。

幽霊みたいに霊力とかが無ければ何もできない相手だと夢も希望も無かったが、相手はこの世界に実体として存在しているらしい。

ならば、なんとかすれば、なんとかなる。

黒羽は意を決して跳躍し、コンクリートの細い塀の上を駆ける。

とにかく、こんな狭い所から離れなければ話にならない。小回りを利かして云々などこっちに攻撃能力があつて初めて成立する話だ。銃器を持つていれば話は別だが今は逃げるしかない。

自分が死ねば、今度こそ確実に紅葉は壊れてしまう。

それだけは、ダメだった。

(紅葉だけは守りたい！)

そのためには、自分が死んでやるわけにはいかなかった。

「ギユガツ！」

大気を巻き上げながら今度は足が振り上げられる。

ボガツ！ とコンクリートの塀が粉々に碎かれ黒羽の体が大きく揺れる。碎かれたコンクリートが民家にぶち当たり窓を粉々に割った。体勢を崩しかけるがそのまま化物の横をぶつちぎる。

(とにかく、公園に行こう)

不意に後ろから金属を捻り潰す音がする。

次に何か引き千切られるような鈍い音。

恐る恐る、肩越しに音がする方を見た。

化物が強大な腕力で近くにあつた自動販売機を握り潰しながら、

コードを引き千切って持ち上げたところだった。

「クツソツ！」

化物はそれを軽々と大きく振りかぶった。

そのあとのことなど、言うまでも無かった。

黒羽は塀の上からほとんど身を投げ出すように堅いアスファルトの上に飛び降りた。

瞬間。先程までいた空間をグシャグシャに潰されたトマトのような金属の塊が根こそぎ削り取った。遙か彼方へと飛んで行った鉄の塊は黒羽の見えないような遠い場所に着弾した。グシャッ！ と何か潰れて崩れ落ちる音がした。

ドッ、と冷たいモノが体中から噴き出す。

恐怖と緊張だけで息が干上がりそうになる。

「いくらなんでも規格外すぎるでしょうが！」

転がるように受け身をとり公園のある方に走りだす。

息は上がらない、体温は適度に保たれる。

だが、恐怖と緊張で体がうまく動かない。

それでも、今は逃げるしかなかった。それが、勝利に繋がると信じて。

「ギユガアッ！」

三メートルを軽く超える巨体がその巨木のような足を使って走りだす。その一歩でアスファルトが抉り取られていった。

しかし、それでも速度は拮抗している。

単純なかけっこではほとんど同格のようだ。

それは違った。

黒羽は後ろをチラチラと見るような余裕を見せながら、公園へと向かっていた。どうやらあの化物を自分に引き付けておくためのようだ。

本気を出せばあんな鈍重な化物程度、速攻で撒けるのだろう。

しかし。

もしも、もしもだ。もしも、あの化物が『ポートファイリア』のある方に行ったら？

それを考えるだけでもゾツとするものがあつた。

走る。走る走る走る走る走る！

生き残ることだけを考える。

助けることだけを考える。

死ぬことは考えるな。

助けられなかった時のことは考えるな。

絶対。その覚悟がなければ、なにも守れやしない。

「待つてる、紅葉！！ 僕は、絶対にお前を守る！！」

一人の少年の誓いは、いくら負けようと傷つけられようと、折れはしない。

黒羽達がああ白い巨人型の化物に襲われる少し前。路地裏には無残に解体された巨大な肉塊が乱雑に陳列されてあった。

壁にはまだ新しい鮮血。地面には飛び散った肉片。

「あちゃちゃ。一匹逃がしちゃったわね」

メルデイは自分の『獲物』を軽く振るい血糊を払った。そんなことしなくても切れ味は落ちないが、気分的な問題だ。

一般人が見れば一生のトラウマになるであろう光景にも眉一つ動かさない。

そんなトラウマ的惨状の中には頭部のようなものが二つ。

三体いたはずの『邪神』と呼ばれた化物の内の一体が戦闘という名の虐殺の途中に逃げ出してしまった。それなりの手傷は負わせていたが、再生能力が尋常ではない。一時間もすれば全快してしまうだろう。

そして昂った精神のまま、民間人を襲う。

彼女にしては珍しい失態だった。

「あーもー。ブランドモノ結構買ったのに、下種な血でベットベトじゃないのよ。どうオトシマエつけてくれるのよ本当にあーもー嫌だ帰りたい」

しかし、そんな血液は急激に乾燥して一気に蒸発する。

転がっている肉片も同様に、一気に粒子と化し大気に溶けていく。「……あーもー。手頃なMはいないかしら？ この苛立った感情をぶつけられるような手頃なマゾ奴隷は」

そのとき、彼女の頭の上で星がぴかぴかと光った。もちろん比喩である。

手頃な奴隷になれるような奴いるじゃん！ と。

そうと決まれば話は早い。

手に持っている武骨な『獲物』。横に一閃したときにはその形は

無くなり、代わりに腕輪だけがはめられていた。

彼女は悪魔のようににっこり笑う。

そして、

「……あいさつは、なんて言おうかしらね」

寂しそつに言葉を紡いで、紫色から漆黒へと塗り替えられた夜に姿を消した。

第一章 8節・9節（後書き）

ご感想ご批判ご指摘、お待ちしております。

第一章 10節(前書き)

はい、これで第1章は終了です。
では、さようなら。

第一章 10節

10

夜の公園では人と巨大な何かが対峙していた。

「ギユガアアアアアアアアアッ！」

狂乱した叫びが夜の公園に響き渡る。

それとともに振り下ろされる巨腕。轟！！ と音を上げながら猛烈な烈風を撒き散らす。

その攻撃が狙っているのは一人の少年。

ほとんど横に跳ぶような形で避けると、すぐさま体勢を整える。

ドゴンツ！ と音がしたと思うと今さっきまで黒羽が居た場所がクレーターになっていた。

上から叩き潰されれば一気に挽肉が出来上がる。そして、その潰れた肉をあゝの化物が醜い口で貪り喰らうのだろう。

「チクシヨウ。なんか、なんか武器になるモンはないのかよ」

あたりを見回すが、鉄棒やブランコと言った一般的な物が目に飛び込んでくる。しかし、遊具であの化物が死ぬとは思わない。人間だって早々死ぬものではないのだ。

それでも、何とかしなければならぬ。

体力は無限ではない。

精神が尽きてしまえば、体力はすぐさま果ててしまうだろう。いくら走っても飛んでも疲れないとは言っても、それには限界があるであろうことも理解していた。

「ギユガギユガギユガッ！」

まるで蟻を潰すような動作で巨大な脚や腕が次々と黒羽を襲う。

横に薙いだ腕を軽く跳躍して避け、突き出された爪先は体を軽く横に逸らすことで避けた。地盤を固めるためのプレス機のような一

撃は地面を揺るがしそれだけで黒羽の体勢を崩す。そこに一撃必殺の拳が振るわれた。

肉の塊が正面に迫る。

固まる恐怖に打ち勝ち、黒羽はなんと一步前に出た。正確には一步前へ出るように倒れ込んだ。

沈んだ体のまま一直線に化物の方へとダッシュする。

まるで壁だ。そこら辺の壁ではない、牢獄のあの高い壁だ。

どんなに身体能力が高かろうと、拳でこれを碎けるはずがなかった。

「ッ！？」

肌を舐めるような死を感じながら、黒羽は化物の股下を矢のように駆け抜けた。

そしてそのままブランコの方へと駆ける。

それについて行く形で化物も一步を踏み出した。ズシン、と地震のような揺れが体を揺らす構わず進む。

別にブランコで一緒に遊ぼうというわけではない。そんなことができれば最初から逃げていないし戦おうともしていない。

このとき、黒羽は久方ぶりに本気で走った。

ほとんど風のような速度でブランコへと突っ込んだ。それを追いかける形で化物も突っ込もうとするが、不意に黒羽の姿が消えた。

「でりゃアアアアアアアアッ！」

彼はブランコの勢いを一〇〇パーセント使い、ブランコを一回転させたのだ。そして、そのままの勢いで化物の背中に渾身の蹴りをかます。

ぐざり、と嫌な音がした。

「ッ！？」

肉を蹴った感触ではなかった。ほとんど岩石に近いだろうか。二ユアンスとしてはイライラしてコンクリートの壁を本気で蹴った時

「万事休す。王手飛車角取り。こちらの手駒は微弱なポーン一体」
相手はナイトと言ったところだろうか。性能的に勝てるはずがない。

そんなとき、彼の目にある物が飛び込んできた。

昼間の、消火器だ。

本来の使用方法は炎以外に向けて使うものではないし、ましてや振り回すものではない。

しかしその殺傷力。日本で起こる消火器爆発事件の多くは重傷などがつきもので、死亡事故も多々ある。

言いかえれば、消火器は爆弾になる。一人を充分に殺せるだけの殺傷力をもった爆弾と言える代物になる。

だが、効くのか。あのコンクリートの壁のような体に。ダメージを与えられたとしても、あの体積では総合的なダメージ量が少ない恐らく、腕一本どころか手の平を吹き飛ばす程度で終わってしまうはずだ。

爆風は起きないから尚更ダメージは低いはずだ。

一撃で、一撃で決めなければ、終わる。

あの『硬い』体を、一撃で行動不能にするためには、どこを爆破すれば、どうやって爆破すればいい。

………『硬い』？

「……見えた！」

黒羽は消火器のもとに走る。懸命に、全力で。

そして、手に取った。ずっしりと、腕にのしかかる重量感。その紅いフォルムの中には何がどんなふうに詰まっているのかはよくは知らない。

ただ。

希望を見出すことができるぐらいには、輝いて見えてしまった。ずっしりと重いそれを肩に背負う。

化物は既にこちらを振り向いていた。

「ギユガッ！」

鉄棒やウンティを弾き飛ばしながら黒羽に迫る巨体。断続的に響く足音は像の行進を思わせた。

棒立ちでは像のよな巨体で捻り潰されるのが落ちだ。大きく迂回するように公園の淵をそって巨体の突進から逃げる。

爆弾には着火が必要だ。自分の拳でやってもできるとは限らない。黒羽は走りながら化物が弾き飛ばした鉄棒の一本を手に取りさらに走る。

後ろからは曲線を描きながら逃げる黒羽の後をのっそのっ走りながらやってくる化物の姿がある。

「こつちだクソ化物！」

「ギユガア！」

挑発したことを感じ取ったのか、化物のスピードが一段と上がった。それでも黒羽には追いつけない。なにしろ、直線しかあの口ケットスタートは使えないだろうから。

黒羽は走る。

化物は追う。

それだけでも十分な戦いだっただけ。

激突するのは一回。それで決めなければ黒羽の負けは確定する。勝算など三割にも満たない。そもそも、この作戦で、この攻撃であの化物を殺せるかどうかなんてものは分からない。どんどん勝算は下がっていく。

だが、守りたいと思うのなら、勝算など考えない。

ただ、やれることをやるだけやるだけだ。

近づいてくるのは滑り台。高さは二メートルと五〇センチほどだ。十分、化物の口の高さに届く高さだ。

「オラオラ化物！ 図体だけデカイ木偶の坊め！ 悔しかったらこつち来い！」

おそらく言葉は通じていない。

だが、

「ギユツガアアア！」

獲物がわざわざ速度を落として言葉をかけてくれたのだ。『早く追いついてお召し上がりください』とでも受け取ったのだろう。唇の無い口角をニイと釣り上げて速度を上げる。

黒羽はカンカンカンカンと音を立てながら滑り台の階段を上っていた。激突まであと数秒だ。

ゴシヤア！ と金属が潰れる音とともに、黒羽は宙を舞った。

そんな黒羽に狙いをつけるように大きく口を広げる化物。

そして、

「さつさとクタバレバ・ケ・モ・ノ・がああああああああああああああああ！」

空中で体を捻り、大きく広げた口内に消火器を突っ込んだ。

そして、手に持った鉄棒でそれを本気で突き破る。

ドバンツ！ と消火器が破裂した。

化物の頭が吹き飛んでいる。

硬い、ということは柔軟性が無いということだ。形を柔軟に変化させ衝撃を緩和させているのではなく、圧倒的強度で形を保っているにすぎない。

ならば、強度を超える衝撃を与えれば、簡単に砕け散る。

爆破の衝撃で地面に打ち付けられ思わず絶息するが、何とか立ち上がった。

三メートルを超える化物の頭部は吹き飛び、ただの肉の塊がそこにはあった。

「終わっ、た……。は、はは！」

笑みが零れる。

黒羽は、紅葉を守ることができた。

夜の公園に一時の平穏が訪れた。静寂を突き破るように黒羽の笑い声だけが響き渡る。

不意に、びちびちと音を発しながら、吹き飛ばされた肉片が化物の無くなった頭部に集まりだす。

「は？」

意味が分からなかった。二十一世紀も末に来た。それでも、こんな規格外の生物は発見されていない。クマムシじゃあるまいし、体の主要機関を潰されてそれでもなお再生する生き物など聞いたことが無い。

たしかに、この化物はこの世界の物理法則が適用される。

しかし、それを超越する何かをこの化物は持っていたようだった。再生されていく頭部を見ながら、絶望が彼を襲った。自分がしていたことの無力さに、何もできない儂さに。

諦めるしか、ないのだろうか。

そうして、完全に頭部を再生させた化物。

大きく、口を開けた。

人と似通った口内。肉を引き裂くための歯もあるし、磨り潰すための歯もある。

あれに、今から自分は喰われるのだろうか。

「は、はは」

万策尽きた。

だが、それでも諦めることはできなかった。

奥歯を噛みしめる。たしかに、何もできないのかもしれない。万策は尽きて、どうしようもないのかもしれない。逃げることでしかないのかもしれない。

それでも、諦められない。

悔しい。自分の無力さが、主人公になりきれなかった自分の無力さが。

熱いモノが、頬を伝った。それは顎を滴り落ち、地面に小さなしみを作る。

「まあ。泣いてる姿が扇情的な奴隷候補ナンバーワンを発見しちゃった嬉しいな」

化物の体が、真っ二つに引き裂かれた。三メートルを超える化物の体が、上から下へと、切られて肉が分断されてから血が噴き出すような速さで、真っ二つに。

二つに分かれた肉片の向こう。

そこに、金髪碧眼、上等な白系のコートを着た少女が月光を浴びながらそこにいた。

ぼかん、という擬音が似合いそうな泣き顔をしている黒羽に対して、少女は聖母のような笑みを浮かべる。

やがて、その顔が悪魔のような笑みに変わっていることに、黒羽は気づかない。

一分ほど見つめあっていた二人だが、少女が唐突に口を開いた。

「相寄黒羽。私の奴隷になりなさい」

起き上がって来ない化物。

一回だけ起き上がって、このサディスティックな笑みを浮かべる少女を一発でいいから殴ってくれないかな、と思った。

第一章 10節（後書き）

邂逅です。

みなさん、出会い頭に一発「奴隷になれ」と言われたらどうしますか？

相手にもよりますよね。廻であつたら美人なお姉さんだつたらついでいりゃ

ご感想ご批判ご指摘、お待ちしております。

第二章 1節(前書き)

第二章です。

葛藤やらなんやらですね。

ではどうぞ。

第二章 1節

第二章 いろいろ説明するサドっ娘メルディちゃん

1

「はじめまして。私、『機関』の構成員、メルディ＝エスグランドよ。よろしくね」

なんだかよく分からないうちに自分の足で立たされ、何だかよく分からないうちに少女が持っていた紙袋を持たされ、何だかよく分からないうちに『ポートフリーア』までの道案内をさせられ、何だかよく分からないうちに自己紹介となっていた。

あれ？ どうしてこうなった？

よく分からないうちに見知らぬ人を家に連れ込んでリビングで向かい合いながらなんかこうなっている。

紅葉は黒羽が帰ってきたことを知ると泣きながら抱きついてきた。黒羽は優しく頭を撫でる。すると、泣きつかれたのだろうか、すぐに眠ってしまった。

というわけで、この少女と二人きりというわけである。

「あら？ こちらが名乗ったのに、名乗らないわけ？ 随分と偉い御身分ね」

「……相奇黒羽、高校二年生になりかけの十六歳。………助けてくれたのはお礼を言うけど、」

「けど？」

「いきなり『鎌』で化物を両断した人間を信じられるわけないだろ」「ふふ。ただの甘い人間ってわけじゃなさそうね、よかったわ」

そう。あのとき彼女はどこからかとりだした『鎌』で化物を両断

していた。その鎌は役目を終えると、一瞬で『腕輪』の形に変わっていた。二十一世紀も末になったとはいえ、そんな馬鹿げたテクノロジーは開発されていない。どう見ても体積が違う。

そんな彼女を警戒しながら黒羽は慎重に言葉を紡ぐ。

「そんな『機関』とかいう構成員のメルデイさんは、どうして僕なんかを助けたんだ？」

「それが私達の役目だからよ。あなたが消火器なんて言う古臭いモノで立ち向かっていた化物。アレを『邪神』と言ってね、あれからあなたたちみたいな一般人を守るための組織なの」

現代の消火器はそんなに古臭いものではない。初期消火どころか、いろいろな場所に燃え移った炎でも対応できるほどに進化している。中に入っている薬剤も特殊な圧縮技術を使い量を増やして長時間使えるようになった。よって、あの爆発力なのだが。

「私達が武器として使っているのは精神感应型兵器（Mental Telepathy Type Arms）。通称MTTA。使用者の精神と連結^{リンク}してその形を変化させるものなの。同時にそのMTTAとの『同調^{シンクロ}』も行うの。この武器自体にも自律神経が入っていて、使用者との波長を合わせることによってより性能を上げる兵器で、」

「ちょ、ちょっと待ってよ。いきなり未知のテクノロジーの説明をスラスラとされても意味が分からないだけだよ？」

メルデイと自分のことを呼んだ少女は、少しだけ天井を仰ぎ見ると、黒羽に視線を戻した。

「私達はその波長の同調の比率を『同調率^{シンクロ}』というんだけどね、それを上げれば上げるほど兵器としての性能が上がるっていう理論^{こと}は分かっているんだけど、絶対に一〇〇パーセントにしちゃいけないの」

「綺麗さっぱり無視しやがった！ 圧倒的スルースキルをお持ちだこの野郎！」

黒羽は頭を抱えて、うがア！ と叫ぶ。紅葉はちよつとやさつと

では起きないだろうことは分かっているので割と本気だ。

（なんだよコイツは。僕は電波系少女との出会いなんて望んでなかったぞ？ なにがどうなったらこうなるんだよ神様のクソ野郎。これならまだ僕が未知の力を覚醒させて悪とぶつかる、っていう展開の方がまだ分かりやすい！）

「錯乱はそこまでにして欲しいんだけど？」

そんなことを真顔で言ってくるメルディという金髪碧眼の少女。

外国人だなー、可愛い女の子だなー、なんて感想は微塵も浮かばない。なんで外国人なのに日本人より日本語を流暢に喋っているのかという疑問すら浮かばない。

とにかく現状を整理しよう。

化物と戦闘。勝利から絶望へ上げて落とされる。そんなとき金髪碧眼の美少女が『鎌』を持って颯爽と現れ、化物を両断。『奴隷になれ』とのお言葉をもらいいつの間に関屋に案内。紅葉が泣き疲れてご就寝。二人きりで未知のテクノロジーについて説明され頭が混乱しかける。

まとめたらまとめただけ余計にまとまらなくなってきた。

情報が足りない。情報と情報をつなぎ合わせるだけの情報が足りない。

「分かった、落ち着く。だから情報をください。もう頭がパンクしそうなんだ」

「だから今話してあげてたじゃないのそんなことも分からないのこの蛆虫脳味噌」

いつきに蔑まれ地の底に突き落とされる。なんとか崖にしがみつけたが、それもあとどれくらい保つやら。

「で、一〇〇パーセントにしちゃいけない理由って言うのは簡単。

君が戦った化物と同じになるからよ。だから精々九〇パーセントが限界」

「その情報はいい。僕には関係がないから」

「え？ 何を言っているの？ 大事に決まってるじゃないの。これ

からの奴隷は召使みたいにご主人様の言うことを聞いているだけでは駄目なのよ？ ちゃんと自分で考えて行動できるだけの知能が無いと最近の奴隷は務まらないわよ」

「だから、今さっきから奴隷だなんだと、何を言ってるんだよ！」
黒羽は苛立ちが限界点に達し、溜まった熱を放出するかのよう
に机を叩きつけた。水の入ったコップが小さくバウンドする。

それに大したリアクションも取らずに、いかにも飄々と言った感
じで話しを続ける。

「だから、最初に会ったときに言ったじゃないの。奴隷になりな
さい、って」

「本気にする奴なんていないはボケ！」

「だからなに？ 君が本気ではなくても、私は本気なのよ」

一見すると恋人の痴話げんかにも聞こえるが、いやしかし。奴隷
になるならないの話しを本気で論じる人間がこの二一世紀末に
いるのは驚きの光景だった。

「私達の間では『隷属化』と呼ぶんだけどね？ このMTTAを扱
う人間のことを『支配者』^{ドミネーター}って言うんだけど、その支配者の波長を
ある程度反映させたMTTAを『隷属化』^{ドミネーター}させたい人物に使うの。
成功確率は脅威の七〇パーセント。どう？ 高いでしょ？」

「低いわ！ 失敗した時のリスクとかが分かかっていない分やけに恐
いわ！」

メルデイは碧眼を薄く伸ばして、嗜虐的な笑みを浮かべる。背筋
にゾクゾクと悪寒が走った。

「失敗した場合は精神の波長を無理矢理変えるようなものだから精
神を壊して廃人。もっと波長が合わなかったら自律神経が入って
いるこの兵器そのものに怒りを買われて肉片にされるわね」

「ハイリスクノーリターン！ おおよそ三割の確率で僕が目も当て
られない廃人に変化！？ そんな危ない橋を現代人が渡るとでも思
ってんのか！」

「目の前に」

メルデイは静かに答えた。嗜虐的な笑みを浮かべていない、本気の顔だった。

「目の前に、一〇パーセント以下の確率に命をかけた現代人が居るわよ」

「な」

「人には色々な覚悟って言うモノがあるの。どんなに確率が低くても、守りたいモノがあるなら、ゼロじゃないなら、それに飛びつくなが人間よ」

そういえば波長を合わせると言った。

人とは全く同じで無いにしろ、似通った波長パターンは持っている。それを他者に当てはめるのは難しいはずだが、ゼロから理解させるよりは簡単なはずだ。

この少女は、ゼロからそのMTTAとかいう兵器と精神の波長を同調させたのだろう。

見事な覚悟だとは思う。

だが、

「帰ってくれ。僕は奴隷になるつもりなんて無い」

メルデイの命令を突っぱねた。たとえ七〇パーセントの確率で超人的な能力を手に入れられたとしても、それが誰かの所有物になるというのなら意味がない。

自分の力は自分が扱えなければ意味がないのだ。

だから、帰ってくれ、と。

「……一つだけ言うておくわよ？ あの化物、邪神は君を襲いにやってくるわよ？ 何でか教えてあげましようか？」

一回だけ間を置いて、言った。

「君に、『ドミネーター支配者』となる素質があるからよ」

第二章 1節（後書き）

用語を並べればいいってもんじゃねえんだよ！
みたいな1話でした。

ご感想ご批判ご指摘、お待ちしております。

第二章 2節・3節

2

メルデイは帰った。どこにかは分からないが、どこかに帰った。おそらくそこら辺のホテルでも借りるのだろう。

去り際にこう言ったのだ。

『三日待つわ。それまでに答えを頂戴ね。いい返事が来ることを待ってるわよ？ あの可愛らしい妹さんを危険にさらしたくないのなら、ね』

悪役張りの台詞だったが、違った。

そのニュアンスはこうだ。

三日間。あの化物に関連する全ての災厄から守ってあげるから、それまでに返事を考えておけ。それでも否定の返事をしたならば、後のことは知らない。他の人員が来るまでひっそり生き伸びてろ、と。

自分にはその『支配者』ドミネーターとやらになれる素質があるらしいことは分かった。より安全に『隷属化』であの少女の奴隷になることでもその力を開花できる。

しかし、裏を返して考えてみれば、その素質を狙ってあの化物がやってくるというのだ。どうして狙ってくるのかは分からない。だが、そのたびに、一緒にいる紅葉までもが危険にさらされるのだ。

返事は、イエスカノー。

しかし、与えられた選択肢は一つしかなかった。守りたいなら。

あの女の子の奴隷になるしか、ないのだろうか。

ある程度波長を同期させたMTTAを使用すると言っていた。ということ、適用された本人の意思もある程度尊重されるのだろうが、基盤となる彼女の意思も反映されるのだろう。

今みたいな自由は、あまり無くなる。

「……どうすれば、いいんだよ」

憂鬱になりながら、黒羽は紅葉の寝室に入った。普段なら入っただけで殺されかけるのだが、今はそんなこと考えられるだけの余裕がなかった。

女の子らしい、と言えばよいのだろうか。

普通にクマのぬいぐるみとかはあるし、最近流行りのV系バンドのポスターなんかも貼ってあるし、机の隅には友だちとのプリクラが丁寧に張ってある。部屋の隅に置かれた嚴重な箱の中には今まで黒羽を苦しめてきたモノがあるのだろう。今日使われたスタンガンも同上だ。

そんな部屋の中、ベッドの上で健やかなと息を漏らしている少女が居る。

安らかだった。黒羽が無事に帰ってきてくれたことを知って安心してきっていた。

一見すれば笑っているようにも見えた。いつも黒羽に見せる笑みだ。

どうすればいいかなんて、分からなかった。

目の前の少女は、もうたった一人の家族だ。この少女の笑みを守るためだったら何でもやった。

路地裏でガラの悪い少年に囲まれている妹を助け出した。海に遊びに行つてナンパしてきた男二人組が強硬手段をしてきたのでボコボコにした。不良になりそうになった時にはその不良グループに謝りに行つて、それでも許してくれない時は暴力に訴えた。もちろん紅葉もちゃんと説教した。

今回の『邪神』とかいう化物相手でも、絶対に、絶対に諦めなかった。

それでも、足りない。

「アニ、キい……」

幸せそうな声で自分の名前を呼んでくれる紅葉。

この笑顔を守るためなら、嘘をついた。親の死を隠蔽して、七年間、守り通した。

今回のことで思い出してしまったが、自分が生き残れて、彼女の精神も落ち着いた。

黒羽は、力尽きたかのようにベッドに腰掛けた。

暗い寝室でも、紅葉の橙色の髪の毛は、その存在感を放っていた。

「……ほんと、綺麗だよな」

黒羽は彼女を起こさないよう優しく頭を撫でる。

びくびくと体が反応するが、いつもは見せないような抜け切った表情を見せてくれる。

分かっていたはずだ。いつかは、答えを出さないといけないことに。

分かっていたはずだ。あとき、化物がまた襲ってくるという可能性も。

それを、いつかいつかと言って引き延ばしていたのはどこのどいつだ。こんな、自分に気を許してくれている少女に嘘をついていたのはどこの馬鹿兄貴だ。

分かっていた。

分かっている、はずなんだ。

「……なんて言えはいいかぐらい、分かっただけなのに」
最善の方法ぐらい分かっている。

メルデイとかいう少女とともに世界を守ること。それぐらい、分かっている。

三日。

心の整理をつけるには、あまりにも短い。全ての準備を終えるには、ほとんど無いようなものだった。

彼女は去り際の去り際に、こんなことを言った。

それはもう、死刑宣告のようなものだった。

『私の奴隷となった場合、あまり同じ場所には留まれないから注意してね。これでも、機関では結構重宝されているんだから』

世界を守るためには、世界を飛び回らなければならない。

ようするに、妹の安全は確保してやるから、今の生活すべて捨てる、と言ったものだ。『機関』というぐらいなんだから、政府関係者とも密接な繋がりがあるはずだ。そもそも、あの『邪神』が関わった事件を隠蔽するのは誰か。その国に決まっている。

もしかしたら、父と知り合いだと言ったこの『ポートフィリア』の大家さんも、実は政府から自分たちのことを保護するように言われたのではないのだろうか。第一、翌年にあの川原に言った時には悲惨だった風景が見事に直されていた。

とにかく、今の生活を捨てる、と言っているのだ。

それが、この目の前の少女を救う唯一の方法だということも分かっている。

だが、それを容認できないのも、たしかだった。

「……………紅葉は、もう子供じゃない、か」

今年で十六歳になる紅葉。考えてみればたったの一歳しか変わらないのに、何をそんなに過保護していたのだろうか。

最近の冷めた兄妹関係、とかなんとかが普通の世の中に身を任せていればよかったものを。なにをそんなに妹に拘っていたのだろうか。

少し考えて、すぐに思いついた。

理由なんて、なかった。

「……………理由なき戦いは暴力でしかない、か」

自分は、いつも暴力をふるっていたのだろうか。外敵に対して、内敵に対して。全ての敵を排除するために、スペックだけが取り柄のこの体を振りかざして。

それでも、守りたいと思う気持ちは、いけないのだろうか。

もっと自分が器用だったら、誰にも暴力を振るわずスマートに解決できたはずだったことも多いだろう。

「ただ、守りたいという気持ちは揺るがなかった。」

彼は、いつでも、理由なき暴力を振るってきたのかもしれない。一人の少女の笑顔を守るために多くの人を傷つけてきたのかもしれない。

それで、彼女の笑顔が守れたというのなら、十分だったんだろう。答えは決まっていた。

自分は彼女に会えなくなるかもしれない。この笑顔を彼女に分かる形で守ることができなくなるのかもしれない。今みたいに一緒に笑って一緒に過ごすことはできなくなるのかもしれない。

答えは決まっていた。

「……………それまで、一緒に笑おうな」

少年はベッドに寄り掛かり、祈るような体勢で一緒に眠りについた。

3

「メルディ。接触の方はどうだった？」

「さあねー。一応いろんなことを説明したけど、そこで終了ね。その後のことは奴隷自身に考えさせるべきね。無理矢理首輪をつけたって奴隷は不満を募らせるだけよ。あくまでも、彼自身に選ばせる必要があるのよ」

「そうか……………、なんだかんだ言って、優しいな」

「寛大な心を持っていると言った方が正しいわね。独り善がりな行動じゃ楽しいものね。やるんだったら、二人の合意の上でなくちゃいけないわ」

「skhtwnmズザ……………電波ktwmbv」

「あー、一旦切るわね。かけ直すまで鼻フックでもかけて待ってなさい」

彼女は携帯電話をパタンと閉じた。

そのとき、ズドンッ！ とアスファルトを砕く一撃が振り下ろされた。

飛んでくる破片を鎌で弾きながら、メルデイは攻撃を放ってきた存在を見る。

全長十メートルオーバー。黒羽を襲った巨人型の邪神をさらに大きく感じただろうか。

それでも、大したことではない。

「さて、と。アイツの鼻が？ げるにはどのくらいかかるかしら？

ちよつと千切れる音がしたぐらいに電話をかけれるのがベストなんだけど」

「ブモオア！」

鈍重な動きで足を振り下ろしてくる巨人型の邪神。

ドスンドスン！ と。地面を何度も揺らしながらメルデイに攻撃を浴びせかけてくる。

彼女はそれを紙一重でかわし、すれ違いざまに各所を引き裂いて行く。

武器としての鎌は一般的に使いつらいし使いどころがないと言われている。先端から大きく反り返った刃では振り下ろした後引き下ろさなければ切り裂けないし、振り回すにしてもブドーロソードなどのほうが使い勝手がいい。

しかし、使い方によっては恐怖の塊と化す。

彼女はわざと、邪神の一撃を鎌の柄の先端部分で受け止め、その衝撃を生かして回転するように一撃をくらわす。まるで舞うかのように敵の攻撃を的確に受け、その力のベクトルを鎌に乗せて返す。さながら台風の目のように、攻撃を受ければ受けるほど、彼女の攻撃は速度を増し、一撃の威力も増大する。

「同調率、二〇パーセント」

彼女とMTTAの波長がさらに連結する。そして、形状を変えた。小さな鎌の柄の部分に鎖がついた鎖鎌という奴だった。

ば近代兵器でも可能だ。そう、あのときの黒羽のように消火器を使つて邪神の頭部を吹き飛ばすことだつて可能だ。

決定的なダメージにならないにせよ、そんな主要機関を潰されれば邪神だつて動きをしばらく停止させねばならなくなる。

その隙に、本命の一撃が叩き込めたならそれで終わりだった。

彼女たちが『邪神』という生物。その正式名称は形状記憶生命集合体。一つ一つの細胞が独立して生命活動を行う生物の集合体のことだ。

吹き飛ばしても切り刻んでも、その細胞が残っていれば元に戻るうとする。

ならば、その細胞一つ一つを犯し殺す武器があればいいわけだ。

このMTTAはそれを可能にした兵器であり、対象をMTTAで傷つけた場合、その細胞一つ一つに電気信号を散布。細胞の機能そのものを止めてしまうものだ。

近代兵器でも火炎放射機で細胞を一つ残らず焼きとばす方法もあるが、如何せん目立ち過ぎる。それも、一つでも細胞が残っていればそこから増殖繁殖できるほど生命力が強い。

なので、細胞レベルで殺せる兵器でなければならない。

彼女が懐から取り出したのは、黒羽が即席で編みだした消火器爆弾などではない。本物の手榴弾。軍用のM67手榴弾だ。

安全ピンを抜き、暴れる邪神の口の中に放り込む。

ズドンッ！ と爆風を伴った衝撃波が顔だけで人間以上の邪神の頭部を内側から吹き飛ばした。

飛び散る肉塊を見ながらうつすらと笑い、ビクビクと痙攣を起す邪神の体をゆっくり下りる。

この程度の被害であれば、おおよそ一分は身動きは取れないはずだ。

突き刺した腕。そこに突き立った一振りの大鎌。それを、ぬぢゃ

つと水気のある音を放ちながら抜きとる。びくびくとした感触が鎌を伝って体に伝わるが、不快な感じはしない。むしろ快感を得られそうだった。

「ほんと、アメーバが巨大化しただけの生物って、髑り甲斐があるわ」

そんな調子で気軽に鎌を構える。

そして。

「あ、ごめん。いい感じの蛆虫を切り刻めたからちよつとした余韻に浸ってたのよ。あなただって女とヤったあとはぼーっとしてるでしょ？ それと同じよ」

『変態と一緒にするな。俺は肉を切り刻んで絶頂に達するほどの変態ではない』

「男が変態じゃなかったら人類はとつくの昔に絶滅してるでしょうね。それに私はイってないわ。そこまで変態じゃない」

そのとき、周囲からいくつもの重厚な足音が聞こえる。

とある少年の匂いに引き付けられてやってきたのか、本当に蛆虫のように湧いて出てくる邪神共。

「ほらほら。キタキタ。じゃ、切るわね。あ、そうそう。鼻フックちゃんとしてた？」

『するわけないだ』

ツー、ツー、と音を立てて通話を遮断する。

そして、彼女は鎌を水平に構える。

「来なさい。邪神の活き造りなんて食べれたものじゃないだろうけど、一応綺麗に飾ってあげるわ」

化物対怪物の死闘が始まる。

第二章 2節・3節（後書き）

そう言えば皆さん。続く台風の被害の方は大丈夫ですか？

廻の学校では体育館裏の崖が崩れてしまい当分使えそうにもありません。

はー、……生徒会活動が忙しいのに。

っと、愚痴愚痴失礼しました。

ご感想ご批判ご指摘、お待ちしております。

第二章 4節・5節(前書き)

遅れました。学校が忙しすぎてもう笑うしかありません。
では、どうぞ。

第二章 4節・5節

4

朝。何事も無く、朝を迎えた。少しだけ濡れたベッドのシーツはどうするかと迷いながら、まだ眠る紅葉の横顔を見てにっこりほほ笑む。それから一回だけ頭を撫でてやると腕を抱きしめられた。

「アニキ〜」

どうやら、可愛らしい寝惚けたしい。

ゆっくりと拘束を外すと、ゆっくりと部屋を後にする。

いつものごとくテレビの電源を入れて、いつものごとく朝の情報番組を見る。

『今情報が入りました。深夜、板橋区にある公園で』

「おお。昨日のことだなこれ」

マスメディアはどこからどう情報を仕入れてくるのか分かりやしない。

『警察の見解としては近くの不良グループが悪戯で犯行を行ったと
のこと』

「不良たちも災難だよな。これで職務質問とか厳しくなるんだから」
『しかし、その付近で一人の少年と、鎌のようなものを持った金髪の少女が確認されているとして、重要参考人として身元を調査』
『急いでテレビのチャンネルを切り替えた。』

まさか、この年で警察に身元を探られるとは思ってもみなかった。メルディは目立つだろう。雰囲気特徴的で、日本人離れた美貌の持ち主だ。まさかとは思うが、かくまってとか言いだすんじゃないだろうか？ と少しばかり本気で気になります。

少し悩んだが、それはないだろう。

彼女が所属する『機関』は国家機密のはずだ。それが一国家のし

ようもない警察に捕まえられたりして身元がばれたりしたら世の中が混乱と恐怖に陥る。多分、彼女が何かしらの手を打つはずだ。

あと三日。

「いや、あと二日と二十四時間か」

テレビの隅に映っている時刻は午前一〇時を示していた。

それまでに、目一杯妹を楽しませてやりたいと思っていたいる黒羽。

そのとき、がちりとドアノブが回される音がした。その方向を見てみると、紅葉が目をこすりながら突っ立っていた。

「おはよう紅葉」

「おはよーアニキ」

いつも通りの会話を交わした。

とてとて、という音が聞こえてきそうな足取りで黒羽の横に歩いてきて、すくとんと座りこむ。そして、腕に抱きついてまた寝息を出しはじめた。

「どうやら、もう少し寝足りないらしい。」

「こてん、と黒羽の肩に頭をもたれさせながら平和な寝顔を見せてくれる。黒羽も彼女の頭に合わせるように体重を預ける。」

「ぎゅっ、と。」

優しく、力強く、手を握り合いながら。

5

「なんで、こんなに、出てくんの、よッ！」

メルディは金髪を靡かせながら巨大な邪神の体を切り刻んでいく。しかし、その端からまた新たな邪神が生み出されて、いくら殺しても意味がない。

報告では数体ではなかったのか。

（もしかして、アイツがミス？ それは、違うわね。こんなにもある邪神の反応を見逃すはずがない。見逃していたとしたら鼻フックじゃ済まさない）

だとしたら、どういうことなのだろうか。

無限に空から降ってくる邪神。ここまでの物量であれば普通の『支配者』であつたら一夜など持たず一時間ほどで死んでしまうだろう。振るわれる巨腕の一撃は廃ビルの脆い壁を砕き、千切れ飛ぶが、すぐにミミズのように這つて腕へと戻つて行く。

メルデイはあの日の夜から一〇時間ほど、戦い続けている。MTTAと適合すると身体能力は格段に増加する。それはこのMTTAに使っている素材にも依るし、そこから発せられる電波のせいでもある。

垂直に跳べば一〇メートルは固い。走ればトップアスリートを悠々と追い越す。ちよつとやさつとの運動をいくらやっても息が上がらない。こう言つた『症状』が現れる。

この『症状』が悪化すればするほど、自身の身体能力は上がつて行く。これが『同調率^{シンクロ}』であるし、しかし『同調』とは違つた『同化』という現象も引き起こす。文字通りMTTA、精神感应型兵器と肉体を同化させるわけである。

MTTAの素材、核^{コア}となつている部分は、邪神の、形状記憶生命集合体の体である。繁殖能力を生物学的に消去し、増殖能力と形状記憶の観点に着目したのだ。その細胞を金属となじませてやると、やがて金属という物質の形状やパターンを記憶する。

あとは、使用者の脳波と連結^{リンク}し、『同調率^{シンクロ}』を上昇させることで細胞を活性化させる。

ゆえに、一〇〇パーセントの『同調』は禁忌とされる。

率直に言えば、MTTAに組み込まれている形状記憶生命集合体の形状記憶細胞SMC (Shape memory cell) が完全に活性化し、莫大な力を得るとともに邪神と同義の存在になり果てる。

化物になるというわけだ。

メルデイも九〇パーセントまでは『同調』したことはある。だが、そこでさえ、いつ飲み込まれるか分からない恐怖に縛られ、一週間

は『同調』することが出来なくなった。

安全に使用しようと思うなら八〇パーセントまで。

『機関』が設定する最低限の基準だった。

「ああもうッ！ 焦らしプレイは嫌いなのに！ プチプチ潰すのが楽しいのは最初の一段时间までよ。さっさと滅亡しちやいなさいよ蛆虫！！」

五メートルほどの邪神の足に鎌を引っ掛け、引くようにして切り裂く。両足を失ったことで体勢を崩した邪神の体勢が崩れそのまま前に倒れ込んでくる。その顔面に鎌の切っ先を向け、決り取るようにして頭蓋骨を引っぺがした。

噴き出る人間のような血液。しかしこれすらもSMCで構成されている自立型の生物の塊だ。しかし、この形状を保っているSMCは外殻部の細胞とは違い蒸発しやすく、常温で蒸発する揮発性抜群の液体だ。

しかし、邪神を一体倒しても、空から二体振ってくるのでは埒が明くはずもない。

舌打ちをしながら、邪神を切り裂いて行く。

一撃でアスファルトを粉碎する攻撃を鎌捌きで力のベクトルを利用し、普通に振る以上の攻撃力を発揮する。攻撃すればさらに上がる攻撃力。止まることない暴力の嵐。

しかし、それでも、減らない。

(……黒羽に、何かあるというの?)

襲い来る腕を斬り飛ばし、股を引き裂く。

あの平凡な少年に、そんな秘密が隠されているとでも言うのか。

だとしたら、この世界はゲームのような世界ね、と自嘲気味に笑うメルディ。

あと二日。

彼女はその時まで戦い続けるしかない。

第二章 4節・5節（後書き）

ご感想ご批判ご指摘、お待ちしております

第二章 6節

6

黒羽はぼやつとした視界の中、ゆつくりと目を覚ました。紅葉はまだ黒羽の肩に体重を預けたまま寝ている。いくら家族の兄だと言っても異性である自分の前でここまでの無防備っぷりを見せられると、いやはや信頼されているのか、それとも馬鹿にされているのか、恐らく前者であることは間違いないが。

ぼやけた視界の端に映ったのは、テレビの隅に映っている時刻。午後十二時三五分。

どうやら二時間以上も二度寝してしまっただらしい。アルバイト先の店長に連絡でも入れようかと考えたが、すぐにやめた。どうせもう行く必要のない場所である。一分一秒でも紅葉と一緒にいたい。

とんだシスコンである。

「それにしても、よく寝るなあ。ふふん、よほど僕の肩の寝心地がいいと見えるぜ」

「……うむ？ ふあゝあ。あ、おはようアニキ」
「……………」

言ったそばから起きられて自分で自分の顔を潰してしまった黒羽。苦笑いを浮かべながら紅葉の頭を撫でると、まさかの正拳突きが顔面にめり込んできた。

「あ、あれ？ 寝惚けてたときはあんなにも甘えてきてくれた紅葉ちゃんが今更反抗期を迎えてどうしたんだらうか？ もしかしておにーちゃん全身抱き枕を御所望ぶばツ！？」

「お、おいおい。まさかアタシのエロティックな体に、寝ている間に何かしたんじゃない？」

「大丈夫だ。僕はシスコンなのを最近自覚したが、近親相姦に手を

出すほど一線は超えていない」

「そ、そうか……」

「?????」

何故か落ち込んだ雰囲気を見せる紅葉。そこは落ち込むところではなく逆にそーかそーかと言いながら背中をバシバシ叩くところなのではないだろうか。

そう言った疑問がふつふつと沸き上がるが、いやしかし。そんなことに時間を割いている暇などない。あと、二日と十一時間二〇分ほどしかいられないのだ。

とにかく行きたい場所を聞いて、出来るだけ楽しい思い出を作らねば。

「そっぴやアニキ、バイトは？」

「やめた」

「……は？」

「いや、いい働き口が見つかったからさ。うん、紅葉は心配しなくても大丈夫だよ。お兄ちゃんが何とかするから」

「いや、アニキがバイトをやめちゃうとは……世の中分らないモンだな」

「それどーゆー意味？ ねー、どーゆー意味なのかな？」

一瞬際どいところを突かれドキとした黒羽だったが、どうやら上手く騙せたらしい。いや、嘘はついていない。命懸けの職場ではあるが、給料の方はかなりいいはずだ。よくなかったらとりあえず脅すしかないだろう。

ではなくて、黒羽が聞くべき言葉や応酬するやり取りはこんなことではなく、

「紅葉。お前、どっか行きたい場所とかあるか？ お兄ちゃんと一緒にいける場所限定だからな！」

これは重要である。

ここで「ダチとゲーセン」なんて言われたら折角の思い出づくりの計画が、計画の時点で頓挫してしまう。しかし、一緒に行きたい

場所とかどんなだよ、という返事が返ってくる。そう思っていた黒羽。

「あるよ」

「そうだよな。いい年してお兄ちゃんと行きたい場所なんて……あるの?」

「あるよ?」

よっしゃあああああああああッ! と黒羽は心の中の大平原で叫ぶ。

いつものツンな紅葉がデレている……っ! と心の中でその感動を噛みしめながら、「どこどこ?」と聞く。

「まずは服屋だな。昨日の約束とやらを果たしてもらおうかねーアニキイ」

「そっちかよクソツタレ!」

どうやら昨日のことを覚えていたらしく、せびってきた。これも兄妹のあるべき形の一つなのだろう。兄を立てる妹の姿なんてどこにもないがな、と額に黒い線を浮かべてふっと笑う。

漫画や小説であるブラコンとか絶対嘘だ、というのが黒羽のもっぱらの持論である。あんなに一途に兄を慕ってくれるとか現実じゃありえないぞ馬鹿野郎、と自虐気味に嘆く。

「その後は、遊園地とかどうだ? サ、サービスで、か、観覧車とか一緒に乗ってやっても、いいぞ?」

「……マジで?」

「ま、マジで」

どうやら、黒羽にも季節並みの春は訪れたらしい。流石に血のつながった家族なのであっち系ではないが、家族としての幸せだ。心の財布が満たされる代わりに、現実世界の財布はしばみまくるが。

「いい、いい! 小さいことは気にするな! もしかしたら紅葉がほっぺにチューとかやってくれる可能性も無きしにも非ず!」

「ないわ!」

「いいや、ゼロではないね！ 観覧車とか気付かなかった重いとかに気付くイベントたつぷり詰まった男として夢の場所なんだから！」
「じゃ、ここでやってやるうか？」

「……い、いやいや。マジな雰囲気は」

「冗談に決まってるんだろがシスコン！」

「いや、分かっているも本人から否定されると結構きついわけで」

「もしかして初恋の相手がアタシだとかいうオチじゃねえだろうな」

「いや、お母さんです」

「禁断の恋には変わりねエじゃねえか！ やっぱそういう性癖の持ち主だったのかよ！」

「い、いや。男の初恋の相手といえば大体はお母さんのはずだぞ！

そ、そういうお前はどうかんだよ」

「ア、アタシ？ あ、あ、アタシは……その」

「いや、いい。隣に住んでたケンイチくんとか言われたらシヨックだから。お兄ちゃんシヨックで寝込んでじゃうから」

「そ、そーか？」

「そうなの」

なんてやりとりをしている間に午後一三時になってしまった。

時間というのは、ことわざにあった『光陰矢のごとし』というやつなのを今更思い出した黒羽。

「よし。ここで紅葉に選択肢をやるう。ここでお兄ちゃんに手作りご飯を食べさせてくれるか、それとも安易に外食にするか」

「よっしゃ外食だ！ アニキ、さっさと準備しろよ」

「……僕の心はすさんでいくばかりだ」

兄とはそういうものである。現実問題、漫画とかのブラコンが羨まし過ぎて仕方がないわけなのだが。

とりあえず珍しくジャージから着替える気になった紅葉を眺めていると包丁が飛んできた。「アニキも風呂とか入りやがれ！ 結構汗くせえぞ！」と罵声を浴びせられた。そうは言っても、自分の匂いなどあまり気にならない、と置いていたが臭ってみたらかなり汗

臭い。これでよくあんなにも熟睡できたものだとの時の自分を褒めてやりたくなかった黒羽。髪の毛も脂が染み込んでいてペタペタしている。

よし、風呂に入ろう。

風呂場に向かうと乱雑に洗濯物が置かれていた。そこに紅葉の下着などもあるがまつたくもって気にならないのは流石兄妹と言ったところか。というより、紅葉の方がまつたく気にしていないのが凄いいのかもしれない。

これはこれで、結構羨ましく思われる兄妹のカタチなのだとは、二人は知りもしない。

彼は乱雑に服を脱ぎ捨て、上半身裸になる。

彼の体を初めてみた者は、思わず絶句することだろう。何故ならば、彼の体には現代高校生とは思えないほどの傷跡が残っているから。

黒羽は、この傷を別に気にしてはいないが、同級生の紅眼に、「どげんか傷負つとぅと？ 黒羽は軍人か！」と恐らく九州地方の方便を使われて驚かれた。軍人、というよりボディーガードと言つて欲しかったが、軍人もボディーガードもなにかを守るという点において大差はないのかもしれない。

適度に引き締まった体におかしなところが出来ていないか確認すると、最後にニヒルに輝くネックレスを外した。物心がつく前にCTスキャンを受けてみたら、奇妙な異物が腹の中にあつたらしく、それを切除した時のものだ。彼としてはそんなモノなんでペンダントなんかにしたんだと両親に問い詰めたいが、今はもういないので栓なきことだ。

浴室に入りシャワーの蛇口を捻る。温かなお湯が体の汚れを洗い流すのを感じ取りながら、髪をわしゃわしゃとお湯に慣らす。

そして、ギリリと奥歯を噛みしめた。

絶対に、絶対に紅葉の前では見せてはいけない表情だ。

「……ちくしょう、楽しいな、ちくしょう。こんなにも、楽しいん

だな、クソツタレ」

今の生活がこんなにも楽しいと感じたことが今まであっただろうか。

黒羽は、今小説の最後のページをしつかりと味わうように消費していつている。どのような展開かは大体読めるが、物語に引き込まれていつてしまう。

もうすぐ、読み終えてしまうというのに。

読み終えた後、言いようのない充足感と虚脱感に苛まれるというのに。

しかし、ページをめくる手の早さはクライマックスに向けてどんどん加速していく。過ぎ去って行く時間もあっという間だ。

あと、二ページと少し。

自分は、この少ししかないページをどれほど時間をかけて味わえばよいのか、どれほどの複雑な気持ちで消化していけばよいのか、分からない。

ただ、一つ言えるのは。

一つ一つの文字を追う目は、もう止まることはないということだけだった。

「……アニキ、大丈夫か？」

「……男なら、意地を張れ」

二十一世紀も末になると様々なモノが世代交代をしている。

まずは携帯電話。そもそもが、すでに電話の形を留めていないモノが多い。

腕時計タイプのもので、そこから映写される3Dの画面を操作する物や、眼鏡に取りつけ、手動で行わずとも脳波を読み取って操作することができるものまで様々だ。こういった技術もあのATMに比べると見劣りしてしまう。プレスレットが刃渡り二メートルはあろうかという『鎌』になったりするのだから。

それはさておき。

そういつた最新技術もさることながら、一昔前のモノだつて影を若干薄くしながら生存している。汎用性が高いものは特に好まれる。最近は装飾過多といつたところか、対して必要のない機能までガシヤガシヤとついでいて操作がしにくい。

そんないいのか悪いのか分からないような最新技術だが、悪い方向ばかりではないのは確かだ。

太陽光発電の最大の問題であつた、光の電気エネルギーへの変換効率の上昇や、それに伴う二酸化炭素の現象。汚染土壌の有効的洗浄方法の発明。クローン技術の応用による絶滅危惧種の再生および絶滅した生物の復活。

娯楽関係ではVRMMORPGというゲーム。半仮想空間に自らの脳波を巨大なサーバー上に展開する広大な世界に送ることで、まるでその世界にいるかのような感覚を覚えられるゲームの普及。アメリカの軍で使用されていたVR訓練の技術を応用して創られたとかなんとか。

そんな中、衣服はというと、今も昔もである。

近未来系のようにピッチピチのタイトのようなものを着こむわけでもないし、半透明の輪っかを肩に引つ掛けて浮上しながら移動するようなものでもない。

普通にセーターがあり、ジャケットがあり、デニムもある。衣服形態はもう変わることはないだろう。まあ、好き者がそういつたものを開発しない限りだが。

ゆえに、オシャレ好きは普通に存在する。

ゆえに、黒羽の財布は極寒状態になつたのは言つまでも無いことだ。

黒羽は今、左右合計六個の紙袋を持っている。高級なアルパカやミンクの商品などもクローン技術で養殖物で出回るようになった。それでも天然の毛がいいという人の方が多いというのだから驚きだ。黒羽としては値段がリーズナブルな養殖のほうにしか手が出せなか

った。

とにかく、財布の中の諭吉さんが地獄の徴税吏レジウチパートタイムマーウーマンに誘拐されてしまって、あとは小銭しか残っていない。

急務である。銀行からお金を卸すのが急務である。

黒羽は左右に視線を泳がせると、ATMを見つけた。

今は紅葉の入学準備などでかなりの出費をした後なのだが、そんなのもう関係ないだろう。コツコツ溜めた貯金。今解放しないですつ解放するというのだ。

「紅葉、ちよつと待ってる。そのATMでお金卸してくる」

「ま、マジかよ。今日のアニキはちよつとおかしい気がする」

「いや、本気で引かれると結構落ち込むんだけど。……いいか、僕がいない間に見知らぬ男に変なことされたら大声あげろよ？ 一秒で抹殺してやるから」

そんなことを去り際に言った黒羽。そんなことを言われたら相手のことを考えると叫べなくなる。冗談にも聞こえるが、黒羽はかなり本気だ。本気過ぎて心配されている紅葉が逆に引いてしまつぐらい本気なのである。

人ごみの中をかき分けながら、黒羽はATMに駆けよる。

紅葉から黒羽が見えなくなったころ、唐突に彼の体が横へと引かれた。間違いなく誰かの腕によって。

腕を両側から拘束され、口もごつごつとした手に覆われてしまつて叫び声も上げられない。

なにより、黒羽の背中当たる硬い突起物が恐怖を煽っている。

なすすべなく、黒羽は路地裏へと連れ込まれた。

第二章 6節(後書き)

ご感想ご批判ご指摘、お待ちしております。

第三章 1節

第三章 事前処理

1

「真桐黒羽。よくも恥イかかせてくれたよなア？ ああッ！？」

黒羽が連れ込まれたのは廃ビルの一室。近くでは他のビルの解体作業が行われていて騒音が激しい。

しかし、だからこそなのだろう。

その廃ビルの一室には二〇人強のガラの悪い少年たちがいた。それら全てが時代遅れながら威力は十分の角材や釘バットなどを持っていたり、中には拳銃を持っていたりする者もいる。おおよそモデルガンなのだろうが、違法改造したそれはコンクリートの壁にめり込むほどの威力を持つ。

今、黒羽の背中当たられていて硬い突起物も恐らくアレと同じ物。本物の拳銃とは違い発砲音も硝煙も検出されないのが利点だ。それに、素人にも容易に扱える軽量感。

普通のナイフを使われるよりも数百倍の恐ろしさを秘めている。しかし黒羽は、そんな状況にながらも飄々とした態度をとる。

昨日の少女の件は、少女の所為にするわけではないが、少女を守るという第一目標があったため下手に出ていた。だが、黒羽としてはこう言う状況はさほど珍しくも無い。

紅葉は美少女だ。口は悪く性格は強いが美少女だ。それなりにモテる。

黒羽も、彼女自身が納得しているのならまだいいと思っている。そういうお付き合いは自発的なものだし、縛り付ける気はさらさらない。

だが、妹が帰ってきてそうそう自室に籠って泣き声を押し殺しているのを聞いたら、黙っているわけにはいかなかった。

彼女もああいう性格ゆえ、付き合う男性もそういう性格の奴が多い。

「憶えてんよなア？ オレにどんなことしたのか憶えてんよなア？」子供にくせに背伸びをする、いや、子供だから背伸びを言った方がいい。そんな男共にもよく絡まれるし、紅葉もそれを疎ましく思っている。彼女は自然とあんなオーラを纏ってはいるが、本当は普通の人間関係を築きたいと思っている。

「だけど、そんな彼女は助けてとはなかなか言わない。ヘンなところに意地を張るのは誰に似たのやら。」

だから、兄は黙って妹を守る。

それで自分がどれだけ恨まれようと、関係なしに。

「なんとか言えやアアアアアアアアアア！」

「なんとか」

カチャリ、と背中に当てられている硬い突起物が強く押し付けられた。いつでも撃てるんだぞと言わんばかりに。

「いや、ね？ しつこい男は女に嫌われるよ。最近は清潔感あふれる男性が流行らしい。清潔系男子？ 清楚系？ どっちでもいいけど。で？ 汚物みたいな言葉をあげてる君は誰だったっけ？ たしかキモサワくん？」

「てん、めエ……」

ぎりぎりと、手に握りしめていたバタフライナイフを座っていた廃材に突き刺し精一杯の脅しを仕掛けてくる。そんな彼に黒羽は一度刺されたことがあるのだが、意識返しとばかりに鼻の骨を折ってやったのでお返しである。

黒羽には余裕があり、不良少年を纏めているリーダー格の少年には余裕がない。

この時点で、殴り合いの勝敗はともかく、人間としての勝敗は決まっているようなものだ。

「家族の時間を奪った罪は、きっちり清算させてもらう」

兄はゆっくりとリーダー格の少年に向かって歩き出した。

第三章 1節(後書き)

ご感想ご批判ご指摘、お待ちしております。

第三章 2節

2

「んん？ アニキ、おっせーなあ……。デ、デートじゃないにしても、女待たせるのはご法度だぞこの野郎」

黒羽に言われたようにちゃんと元いた場所から一步たりとも動いていない紅葉。彼女には忠犬のスキルがあるに違いない。

そんな彼女は嫌でも人目につく。

煌びやかで温かみのある橙色の髪の毛は人工の染髪料では醸し出すことが出来ない雰囲気を持ち、それに付随する瞳も綺麗な橙色。顔も綺麗な逆卵型で、非の打ちどころがない。服装もいつもの色気のない橙色のジャージではなく、春モノのブラウン系のコートを着ている。スカートは短めで、黒いストッキングでその足を覆っている。

歩いて行く男共の視線が痛いほど集まる。隣に彼女がいる男性すらも目を持って行かれるが、女性に小脇を肘打ちされると苦笑いをしながら去っていく。

「……クソリア充共め、爆発すればいいのに」

眉間に深い皺をよせながら、過去の忌々しい記憶がよみがえってくる。本当に忌々し過ぎて嫌になるのだが。

紅葉は、男運が悪い。それは、彼女の女友達が言うもっぱらの持論である。

たしかにそうだ。付き合う男は全て不良。一週間ともたない。暴力を振るわれる。覚醒剤の売女になれとか言ってくる。いきなり襲われる。犯されそうになる。逃げたらナイフを持って追いかけてくる。

今まで散々な目にあった。

そんな『男運が悪い』発言をした女友達から言つと、彼の兄である相寄黒羽は神さまの唯一のご厚意であるらしい。

たしかに、兄である黒羽はカッコいい。妹である紅葉から見ても、本気で惚れてしまいそうなほどカッコいい。

しかし、いまだかつてあの兄貴がモテている姿を見たことがないのも確かだ。

紅葉は知らないだろう。彼が学校では三バカと言われるほどふざけている、カッコいいけど残念な人ランキング堂々の第一位に輝いていることなど、露ほども知らない。

閑話休題。

そんな黒羽は、今まで数え切れないほど自分を守ってくれた。一番古い記憶では、野放しにされていた大型犬を相手に、木の棒で立ち回る幼稚園生の黒羽の姿が思い出される。

最近では、あの、白い怪物だろうか？

そういえば、あの怪物は一体何だったのだろう。なんだかんだ言っているが、昨夜から一日も経っていないのだ。今まで疑問に思わなかったのが不思議だが、頭があまりの状況変化に追い付いていないだけだろう。

ロシアか北朝鮮あたりの生物兵器だろうか。現在のクローン技術を悪応用すれば、あんな形の醜い生物を生み出すことも可能だろう。それを相手にして返ってきてくれた黒羽もまた、カッコよかったと心の中では思っている。

（なんかアニキの方はっかに話が逸れちまうのは何でだ？ 不思議だ……じゃなくて、あの白い化物は、一体……）

三メートルを超える二足歩行の生物なんて聞いたことがない。あれが近年の環境変化によって生み出された自然生物とするならば、それはとても恐ろしいものだ。まだ、人間が故意に生み出した方が対処法は見つかる。創られたウイルスには、抗生物質が同時に創られるのと同じように。

しかし、自然発生したのなら性質が悪い。どんな微弱なウイルス

でも、一から遺伝子情報などを調べて有効な薬を創らなければならぬ。

ならば、あの生物に対抗する手段といえは何なのだろうか。

生命活動を行っているのならば、その主要機関である脳や心臓の破壊といったものが一番手っ取り早いはずだ。

逆に、あの生物が群体としての生物なら逆効果だ。

例をとってみると、蜂だろう。

蜂は、女王蜂という主要機関を持っている。彼らは一匹一匹の意思は尊重せず、群としての生存を最優先に考える。

ゆえに、主要機関たる女王蜂が死んでも、他の雌蜂がその座にとって代わり、蜂の巣というコロニーは生存し続ける。

腕や足といった部分に当たる働き蜂に攻撃を加えて殺しても無駄。すぐにほかの蜂がその穴を埋めて機能の円滑化を図る。

そういった生物の対処法としては、一網打尽が一番なのだが。「……って、何難しいこと考えてんだよ」

危うく生物学の道に進もうとした紅葉。

一般市民的な考えとしたら、もう二度とあんな生物は出てきて欲しくないというのが本音だった。学者のような変態にはなりたくない。

腕時計を見てみれば、既に午後十六時。これから遊園地などに回れない。それは明日になるだろうと思うと、若干惜しいモノがある。顔をしかめていると、不意に声をかけられた。

「よオ、ひっさしぶりだなア？」

「……………」

昔付き合ったことのある少年だ。確か名前は、

「常非？」

「一緒に来てもらおうげひゃッ！？」

お得意のボディーパーカーをかまし、そこから背面投げにつなげる。命名するなら、モミジコンビネーション。

あっけなく気絶する常非を一瞥し、周囲を見回す。

他にも四、五人。見知った顔がいる。

どれもこれも腐ったような奴らばかりだが。

「アーニーキー！」

これは面倒だと思ひ周りの雑踏に負けないう声を張り上げて黒羽を呼んだ。

しかし、肝心の黒羽は一〇秒待っても現れない。それもそうだ。

近くのATMに行つて、かれこれ三〇分は返つて来ないのはおかしい。既に他の少年たちに拉致られていると見て差し支えないだろう。

「頼りになるおにイチちゃんは、いまごろ血まみれだろうねエ？ テメエがやんちゃばつかしていい子ちゃんのおにイチちゃんに迷惑ばっかかけちまうんだからよオ」

「……………」

既に名前も覚えていないような少年が紅葉に近寄ってくる。吐く息は離れていてもタバコ臭く、開いた口は所々欠けている。おそらく覚醒剤にも手を出しているのだろう。

「テメエが大人しく俺たちのゆーこと聞けば、おにイチちゃんは助かるかもなア！」

げらげらと、蟾蜍のような笑い声をあげる少年たち。

完全に、頭のねじが外れている。理性なんか微塵も感じられないような焦点のブレ続けている瞳。ふるふるると小刻みに震える指先は恐怖なんかではなく、中毒症状だろう。

「ああん？ どうしたよモミジイ、いきなり黙っちゃってよー。その可愛いツラア見せてくりやぶツ！」

少年の頭を右わきに挟み、腕で締め付け、そのまま背面に持ち上げ投げつける。肉付きの悪かった少年は羽のように軽く持ち上げられた。

いつも黒羽にかけている技の一つだが、あの優しくて強くてカッコいいアニキ以外に使つと、こんなことになってしまう。貧弱だ。脆弱だ。虚弱だ。最弱だ。

虚勢しか張れず、弱い者にしかせびれないこいつらのような人間

は、間違いなく弱い。

彼女だつて自分が周りから見れば出来そこないだということぐらい分かつている。強くて出来の良いアニキに頼るしか出来ない人間だということも分かつている。

「ただ、目の前の下種な少年たちとは違つつもりだ。」

「女だからつて見てつと、テメエらのナニ潰しちまうぞ蠅野郎」
女は守られるだけでは終わらない。

第三章 2節(後書き)

ご感想ご批判ご指摘、お待ちしております。

第三章 3節

3

黒羽は例の廃ビルから遁走していた。

あそこまで格好よく偉そうに啖呵を切ったからには一方的な展開が待っている、そう思ったことだろう。黒羽自身もモデルガン程度ならわけないし、バタフライナイフなんておもちゃも問題にはならない。釘バットなんかは見た目は恐ろしいが、使う本人の筋力が覚醒剤や運動不足によってへろへろになっていて避けるのも容易い。

「あいつら、あんなモン持ち出して、本気で殺すつもりかよッ!?」
そう。

そんなおもちゃとは比べ物にならないほど厄介なものを持ち出してきた。

とにかく人通りの多い所に出ようとしますが、あまり出かけることのない新宿なんてところに来てしまい、どこをどう歩いても人通りの多い場所に出ることが出来ない。

焦る彼の後ろから、着実に迫ってくる邪悪な唸り声。

どるるる、と。ともすれば車のエンジン音のようにも聞こえる唸り声が聞こえる。

それも一つや二つなどではない。軽く一〇は超えるだろう唸り声は、逃げ惑う彼の後ろをゆっくりと、しかし確実に詰将棋のように追ってくる。

「あんなものの対処法なんて、どこの防犯マニュアルにも載ってねえよくクソツタレが！」

ナイフなどであれば、刃に目を移さずそれを振るう腕の動きに注目して、慣れていれば結構簡単に避けられるし、逆に懐に潜り込むことで反撃することもできる。角材や釘バットだって同じだ。一発

の振りが遅い分、なおやり易い。

しかし、あれは違う。

何が違うかといえ、その破壊力が違う。

ナイフや角材、釘バットなんかは、掠った時のことを考えても大した傷にはならない。そう考えることが出来るほどの脅威しか、そういう凶器には無い。

だがしかし。

今、黒羽の後ろを追っているソレは掠っても大したことにならない、なんてことはない。掠っただけでも肉の一部が削れ、弾け飛ぶなまじ刃の部分がアレな構造になっているので、その恐怖もひとおではない。

普通は凶器として扱うものではない（それを言ったら角材や釘バットもだが、世間への普及的な要素として）。普通は人が住む家などを造るためのものであるし、そういうたものを破壊するものもある。しかし、危険性はない……はずだ。

それが恐怖の対象として、またはお笑いの対象として定着したのはいつごろだっただろうか。

たしか、今から一〇〇年ほど前のハリウッド映画で、ホッケーマスクを被った男がソレを振り回して阿鼻叫喚の渦をつくり、その一〇数年後、二本のバラエティに取り上げられ笑いの対象になったのだ。

しかし、現実の威力は、本気で笑えるほどのものだ。

どるるるると。

なおも黒羽に迫るその唸り声。あんなもので集団リンチされれば、もう目も当てられない。唯一の血縁関係に当たる紅葉でさえ、いや、もしかすると解剖をする解剖医ですら、目を向けることすらできないだろう。

もったいぶりに、もたいぶりまくったが、言ってしまうえば簡単だ。

技術が進化しても、その原始的な形を変えない、チェーンソーと

第三章 3節(後書き)

ご感想ご批判ご指摘、お待ちしております

第三章 4節・5節

4

「な、なによ、アレは……ッ!？」

メルディは金の髪を風に靡かせながら、滅多に切らさない息を切らしながら、人気の全くない路地を遁走していた。額には汗を滲ませながら、そして左腕に大きな傷を負い、貧血で倒れてもおかしくない血を流していた。

後ろを振り返る暇もない。そんなことをしていたら、あの怪物においつかれてしまう。いつまでも逃げ続けるつもりはないが、とにかく今は一旦逃げて体勢を立て直さなければ戦うもクソも無い。

突然だった。電話の男からかなり強力な邪神が日本に来ていることは聞いていた。それでも、メルディにはどんな状況だとしても殺せる確信があった。自信ではなく、確信だ。

突然だった。邪神の群れと徹夜で戯れている最中、突然ヤツは現れた。

そして、周囲の邪神もろとも、こちらに攻撃を仕掛けてきたのだ。敵も味方も無い、まさに人斬りの鬼のように。あまつさえ、人のように、否、人よりも感情を露わにして、襲いかかってきた。

大きさは、成人男性と同じほどで、出てきたときは油断していたのかもしれない。しかし、おかしなところがあった。服などを着ているのだ。全身真っ白なのは変わらないが服を着ていて、手には日本刀らしきものを握っていた。

その時点で、おかしかった。

S M Cで構成されている形状記憶生命集合体である邪神は、その体の細胞一つに至るまでが意思を持っている。数京という生命の群体であるにも拘わらず、何故邪神が生物としての形を保っているのかという、個々の細胞が『根』と呼ばれるナノメートル単位の織

毛を出して他の細胞を結びつき独自のネットワークを築くからである。

しかし、それでも全ての意見をまとめ切れるはずもない。邪神には『脳』に値する部分が無いからだ。なので、ああして凶暴な性格となり、傍若無人に餌を求めて徘徊する。

しかし、ならあの人間然とした態度をとっていたのはどうしてだ。不可能なはずなのだ。『機関』の研究部の報告には無かった。冷静に戦略を練って、『頭』を使ってこちら側を追い詰めるなんてのはあり得るはずもないのだ。

前述したとおり、邪神には『脳』に値する部分が無いので情報をまとめきれない。

ありえない。そんな言葉が彼女の頭の中を埋め尽くしていく。

（まさか、邪神は進化しているとしても言うの？ 高度な知能を持つ人の形を真似ることによって、高度で効率の良い狩りの方法を手に入れようとして、『脳』すらも手に入れた？）

それこそありえない。SMCが発見されてから三〇年も経っていない。人間が一体どれほどの年月と犠牲を払って今の体系に進化したと思っているのだ。何度も生命の危機を感じながら、何度も試行錯誤を繰り返してきた結果が、今の自分たち人間である。進化を繰り返してきた結果が、今の自分たち人間である。

にも拘らず、たったの数十年程度で、その歴史を覆された。それも、人間よりも高性能な形で。

（……邪神は数京の生命の塊。独自のネットワークを構築、共有している……）

そこまで行って、メルディはすぐさま気付いた。

（ま、さか……私達は一つの生命として一つの経験を何度も繰り返さなければならなかった。けど、邪神は、一回の経験で数京という経験値を得られたりするわけなの？ 冗談じゃないわよ）

経験値の共有。それが邪神の台頭の真実なのか。

だとすれば、あと数年もすれば地球上は人型の邪神に覆い尽くさ

れてしまっただろう。人類とは桁違いの身体能力を有し、人類以上の進化の速さで今以上の文明を築き上げてしまう。そこに、人間の居場所など、どこにもない。

そこで生きていける人間など、三人ほどしか思い浮かばない。

「……けど、おかしいわよ、そんなの。何で餌である私たちから、搾取すべき相手から学ぶて言うのよ。『支配者』ならともかく、何の抵抗も出来ない人間達からどうして学び取るうと思ったのよ。そんなの、人間が豚に学ぶのと同じじゃない!」

現時点を持つて地球上最強の種族は邪神だろう。それは平均をとるとしたらであるが、ライオン程度が三メートル以上の巨人を倒せるとは思わない。像が一〇メートルを超す巨人を倒せるとは思わない。人間が

同じ人の形をした怪物を倒せるとは思わない。いきなり、人類のピンチである。おそらく、人の形に進化した邪神共は人間たちを駆逐し始めるだろう。人間が進化の隣人である他の類人猿を殺していったように。

そのとき、両脇のビルの壁に線が奔る。彼女は反射的に身を前に投げ出した。

瞬間。空気を突き破る音を放ち、斬撃の波が走り抜けた。ビルの壁が綺麗に切断され、数秒後切断面からゆっくりとずれ始める。すぐさま起き上がるとほとんど転がるように前へ前へと走る。

久しぶりだった。邪神を相手にして恐怖を覚えるのは。

両脇のビルの壁が崩れ落ち、無数の残骸が頭上から降り注ぎ、粉塵が舞い上げられる。

彼の者の刀もおそらくはメルデイ達が使っているMTTAのようにSMCが使われているはずだ。というより、普通の鉄の刀でここまでの威力を出されてはたまらない。

一瞬だけ後ろを振り返る。舞い上げられた灰色の粉塵の中に、まっすぐこちらに歩いてくる影があった。こつん、こつん、と足音を立てながら、まるで恐怖心を煽るかのような動作でゆっくりながらも確実にこちらに近づいてくる影が。

「この……………ッ!？」

怒りに燃えて思わず反撃に出ようとしますが、それは躊躇われた。彼女の任務は『とある少年の勧誘』。それにほとんど成功している時点で、あとは少年の保護および防衛が任務目標となった。

おそらく、粉塵の向こう側にいる人型の邪神も他の邪神と同様に黒羽の『匂い』のような物に引きつけられてやってきたのだろう。ここで自分が倒れば、おそらく、あの少年の下に向かう。最弱クラスの邪神に手傷しか与えられない少年の下にだ。
それだけは、避けなければならない。

「……………ちッ」

少女は金髪を振り乱しながら暗がりの路地へ走り抜けていく。少しでも少年からあの怪物を引き離すために。

そのとき、すぐ後ろから、チン…………と静かに何かを納める音がした。

瞬間、今度は地面に線が奔り抜ける。堅いアスファルトを豆腐のように裂きながら、無数の斬撃の波がメルディに襲いかかる。

舌打ちを打つ暇も無く、彼女は壁を足場に上空へと難を逃れる。月面宙返りを決めながら怪物の姿を視認する。舞いあがった粉塵が段々と薄れていき、その死の姿が露わになる。

色素が抜けたような全身白の人間。瞳と髪の毛の色だけは全てに浮いて出るように黒で、服は白いロングコートだ。

ゆっくりと、目があった。

そこで、気付いてしまった。ここは上空で、逃げ場などどこにもない。翼が生えているわけでもなく、ブースターも生憎持っており、ワイヤーもホテルに置いてきてしまった。

膨大な殺気が、大気を震えさせる。数京という生物の塊、思念の塊が、こちらにその意思の全てを向けてきた。髪の毛一本、血液のミリリットルまでもが、彼女に殺意を向ける。まるで、蜂の巣をつついた時のように、全身が総毛立つ。

怪物が腰にかけてあった白い鞘に納まる日本刀の柄に手をやった。

彼の者の全身からあり得ないほど力が抜けていくのが分かる。

脱力。

彼の宮本武蔵のように、自然体からの爆発。火山の噴火のように、一気に弾け飛ぶ。

「……………死ネ」

「ぐ、八〇パーセントッ!!」

黒い腕輪が生物のように、バキバキと音を立て瞬時に大きな白い鎌の形となる。その巨大さは圧巻の一言。全長八メートルは超している。

それを空中で我が身のように振るい、遠心力を極限まで高める。その巨大な鎌の切っ先のヘッドスピードが音速を超える直前に、怪物から振るわれた刀の衝撃波とぶつかり合う。

大気に亀裂が奔った。大地が悲鳴を上げた。

ぶつかり合った衝撃の塊が周囲に凶器となりばら撒かれる。破壊^{バク}力からいっても、竜型の邪神と同程度の破壊力がある。あの人の姿のどこに力が蓄えられているというのか。

白い巨大な鎌を大きく後ろに押し返されたメルディだったが、ここからがメルディの鎌捌きの見せ場だ。

押し返された力をそのまま利用し、空中で体を捻り、さらなる遠心力を鎌の切っ先に乗せて怪物へともう一度振るう。この間わずかに〇・一秒ほど。メルディも十分怪物レベルだ。

しかし、完全なるマージンを得るためには同じレベルでは駄目なのだ。最低でも一段上から相手を見下ろすぐらいの余裕はないと、すぐに足元をすくわれてしまう。個々としての実力をさらに補うために存在しているはずの『機関』なのに、最近裏切り者すら多発していると来た。本末転倒だ。

「さつさと死になさいよ巨大アミーバあああああああああああああ
ああッ!!」

「邪神、というのдарウ？」

ふっ、と。先程までは巨大鎌の竜巻のごとき連撃の嵐を地上で受

けていたはずの怪物の姿が忽然と姿を消していた。その代わりに聞こえる音と形容していい禍々しい声。

後ろから。

ゴバツ！ と自らの体が逆側に曲がるのを感じた。瞬間。彼女の体がミサイルのように地面に落下した。弾け飛ぶアスファルトの地面とコンクリートの壁。舞い上がる粉塵の中、少女は鎌を杖代わりにして立ち上がる。

落下の瞬間に鎌で減速していなければ間違いなく体が地面のシミとなっていた。

背中痛みを我慢しながら彼女は走りだす。路地裏の闇の彼方へと。

絶望の底に、沈んでいくかのように。

5

「ふん、雑魚が」

紅葉は数名の男を片づけ、体についた埃をぼんぼんと叩いて落としていた。周りの女性からは尊敬の眼差しが送られ、男性からは恐怖の視線が送られている。

一様に、股間あたりに手をやりながら。

「まあ。これに懲りて女に不用意に手を出すなよ？ 次絡んできやがったら、本気で潰すぞ？ ××××を」

地面で伸びている男共にそう言葉を吐くと、周囲から歓声が上がります。鬱陶しそうに顔をしかめると、紅葉はゆっくりと歩き出した。

今度は、アタシがアニキを守る番だ。

そう思った時、かなり近くで何か巨大な物が崩れ落ちる爆音がアケードに響き渡り、歓声が悲鳴に変わった。

「……アニキ！」

何だか分からないが、黒羽があそこにいる気がしてならない。それが、今からあそこに巻き込まれる気がしてならない。そして、き

つとそこには女の影があるに違いない。

「……べ、べつに心配してなんかないんだからなっ！」

ベタな台詞を吐き捨てる、紅葉は人の波に逆らい走りだした。

第三章 4節・5節（後書き）

ご感想ご批判ご指摘、お待ちしております。

第三章 6節

6

「くっそ」

空がオレンジから紫色に変わって行く。昼から夜へと、その姿を変えていく。

それよりも先に迫り来るのが、チェンソーという凶器を構えた一〇人程度の不良少年たち。その後ろには実銃並の威力を有したモデルガンを構えた少年が数名。バタフライナイフを構えた少年たちはだらしなく笑っている。

このままでは、黒羽の人生はここで幕を閉じる。倫理的に殺されるはずがない、なんてことは口が裂けても言えない。

あの少年たちの理性は尽く崩壊している。おそらく、ここから運良く逃げだせたとしても地の果てまで追ってくるだろう。警察に逃げ込んで警察官さえ殺しかねないのだ。

ジリジリと近づいてくる少年たちに対して、黒羽は一步、また一步と後ずさる。しかし、それすらも長くは続かない。少年たちは狩りを楽しんでいる。片をつけようと思ったら、今すぐにも黒羽の体は四散するだろう。

そのとき、遠方で轟音が轟いた。何かが崩れ落ちるような、何かが発射するような、何か衝突するような、そんな轟音だ。

少年たちの意識が一瞬そちらに向くが、こちらに向き直す。

「ヒッヒッヒ！ 最後に妹の声でも聴かせてやろうか？」

リーダーの少年はチェンソーを片手で支え、もう片方の手をポケットに突っ込み、携帯電話を取り出した。器用に番号を打つと、耳に当てた。

「モミジを出せ……ああ？ 全員やられたア！？ このカス共が

！ くそっ！」

少年は苛立ったように携帯電話を閉じると思い切り地面にそれを叩きつけ何度も踏みつけた。基盤がむき出しになり、外殻が粉々に砕け散る。

「ああ、もういいや。ヤれ」

いきなりの突撃命令だ。雄叫びを上げながら突っ込んでくる少年たちを重心を低くして待ち構える。

だが。

「ああ？ 地震か？」

突如、大地が震え始めた。しかし、これは地震ではない。例えるなら、巨大トラックが数十台並んで走行しているかのような、そんな震えだ。

ようするに、地球自身の行動ではなく、外的要因。

瞬間。少年たちの横のビルの壁が砂糖菓子のように砕け散り、そのまま少年たちを巻き込んだ。

それだけで突撃してきた少年たちは壊滅し、一番頭を悩ませていたチエーンソー部隊はリーダー格の少年一人を残すばかりとなった。そんな少年も現状が掴めていないらしく、口をポカーンと開けて現実から逃避していた。

ガラガラと崩れた瓦礫の中で何かが動いた。まだ意識があったのかと、黒羽はそちらにも意識を割く。

ドガン！ と瓦礫を吹き飛ばしてそれは立ち上がった。

流れるような金髪は所々赤黒く汚れている。そこから覗く碧眼は今ではくすんでいて、疲れきっているのが目に見えて分かる。

メルディ＝エスグランド。あの白い化物を一撃で葬り去った女性。「くれ、は……？ に、げて」

その少女が、今では虫の息となり、その細々とした息を擦れがすれに吐きながら、黒羽に、『逃げて』と言った。

何が起こっているのか分からない黒羽は、今にも倒れそうになっているメルデイのもとに駆け寄った。

「なに、してるのよッ！ さっさと逃げろって言うてんのよッ！」
あまりの気迫に気圧されて一瞬たじろぐが、それでも歩を止めなかった。しかし、メルデイの方は何か追いつめられているような瞳で黒羽を睨んでいた。

「あなたは、いつもいつも……」

「いつも？ ……なにがあつたんだ？」

メルデイは視線を瓦解した壁の向こう側に向けた。粉塵が舞い上がっており、ほとんど先が見えないような中、一つの影が揺らめいていた。まるで陽炎のように、そこに存在するべきでないように。

「真正正銘のバケモノ。巨人型の邪神をあのサイズにそのまま小さくしたようなパワー。そして、なにより理性の発達」

「理、性？」

「違うネ。本能だとモ」

突如、粉塵の奥に揺らめく影から言葉がかけられた。声のトーンは男性のソレで、本能のままに動いていたあの邪神共の雄叫びとは次元の違う知性を感じさせられた。

その影が勢いよく腕を振ったのを目視する。瞬間、粉塵が全て吹き飛び、その姿が露わになった。

「人………？」

「どうやら、邪神と呼ばれているらしいヨ」

流暢な日本語でそう話す、自らを邪神と呼んだ男。髪と瞳以外の全てが真っ白で、腰には純白の鞘に収まった日本刀がかけられている。

「な、なんだデメエ」

あの破壊に巻き込まれなかったリーダーの少年と数名の少年が各々持ち合わせている凶器を構えた。あそこまで恐ろしかったチエー

ンソーが、今では玩具にしか見えないのはどういうことだろうか。

「個体を表す記号のことかな？ それなら与えられているヨ。リーダー。それがオレの名だ」

リーダー。刈る者。

しかし、この邪神。与えられた、と言わなかったか？

それはつまり、

「なにか、組織があるとしても言うの……？」

いきなり台本には無かった台詞を言われたように慌てて言葉を紡ぐメルディ。ポロボロの体で、それでもなお敵意ある瞳で男リーダーを睨みつけていた。

「その質問に答えるのは、まだ早いと言われていル」

どうやら、相手もそのことは承知の上らしい。それでも、まだ名乗るべきではないと、このバケモノの上の奴らは言っている。そう捉えていいのだろう。

「や、やっちまえ、やっちまえエエエエエエエエエエ！」

そこで、ダムが決壊したようにリーダーの少年が叫び散らかす。

それに押されて震えていた少年たちがリーダーに突っ込んでいったここで、普通の人間ならば一分と経たず気を失ってしまうだろう。

しかし、化物の取った行動は単純だった。

純白に彩られた、美しくも禍々しい日本刀の柄に手をやると、ほんの僅かにその刀身を路地裏の闇に煌めかせた。

瞬間、轟ッ！！ と爆音を立てて周囲のコンクリートやアスファルトが粉微塵に吹き飛んで行った。

散らばりゆく残骸。無数に奔る線上に、少年たちの体も確かにあった。

しかし、数瞬後。その体が真っ赤に染まり、一秒後、内側からの血圧に耐えられなくなっただかのように体液を撒き散らして爆散した。残るは、リーダーの少年一人だった。

「逃げろ！ おい、聞こえてんのか、逃げろって言うてんだ！」

黒羽は、もう先程の殺し合いのことなどどうでもよくなっていた。

たしかに、許されることではない。だが、このままでは一方的な虐殺が始まってしまう。それを見殺しにしたら、正義どころではなく、もはや人間ですらなくなってしまふ。

しかし、リーダーの少年はその場に腰を落としてしまった。糸が切れたマリオネットのように。

「フム。オレもその女とじゃれあつて小腹がすいてい夕。マズそうだが、喰らうとする力」

黒羽は、リーダーが何を言っているのか一瞬理解できなかった。喰らう、というのはつまり、どういうことなのだ。ほんのわずかな間だけ、理解力が赤子並みに低下してしまっていた。

そして、理解する。

リーダーの、本質を。

リーダーの純白の右腕が、肩口から真つ二つに裂けていく。肉と骨が組み替わる鈍い音があたりに響くが、リーダーは涼しい顔で力の抜けた少年を見下ろしていた。

それは、口になっていた。肩からぱっくり裂けた腕は、鮫のような歯が居並ぶ、禍々しい口となっていた。

「喰らえ」

「え、ひ、ぎゃぎゅあああああああああああああああああああッ!？」

その腕が少年の足を食んだ。リーダーはそれをさも当たり前のように見つめる。人間が食卓に並んだ肉を見るかのような瞳で、リーダーの少年を見下ろしていた。

少年の体がどんどん減少していく。そう、減少という表現が正しい。足の先からどんどん、まるで味わうかのようにゆっくりと、悲鳴をクラシックのように聞きながら、喰らう。

喉まで喰われた少年。白目になり、鼻から赤黒い液体を垂らしながら、それでもこう言った。

『助けて』と。

身勝手かもしれない。自分を殺そうとして置いて、それは随分と

「ふざ、けんなア！」

「ハアアアアアアアアアアアアアアアアッ！」

気合い烈昂。雄叫びを上げながら、メルディが大鎌を掴んでリーバーの腕を切り落とす。

急に訪れる落下。凄まじい首の痛みと共に咳き込んでしまう。

腕が斬り飛ばされた。それならば、もうあの腕は元には戻らない

「フン、たしかに断面は切れるようだが、オレたちを従来のあいつらと一緒にしないで欲しいナ。ただ傷口を盛り上げるだけが塞ぎ方ではない」

瞬間。メゴツ！ とリーバーの腕の切断面が盛り上がり、どんどん元の腕の形を成していく。肩口から斬り飛ばされた腕が、完全に元に戻った。それにはメルディも驚きを隠せない。

「オレにはココがある。数京の生物の群体であるオレは、その命全ての使い道を理解している」

リーバーが、初めての表情を見せた。

喜び。

そう。彼は、笑っていた。

そして、絶望は一步、死へと踏み込む。

死と言う概念を、どこかに置き去りにしてしまったかのようだ。

「さて、終わらせようカ」

進化した邪神は、人間に牙をむく。

数京の、悪意と言う名の牙を。

第三章 6節(後書き)

ご感想ご批判ご指摘、お待ちしております。

第四章 1節・2節

第四章 女の子を守るのは男の役目

1

「逃げて」

白の男、リーバーを睨みつけながら力強く、しかしどこか消え入りそうな儚さを伴わせた声を黒羽にかける。いや、これはもはや命令に近いだろうか。

しかし、黒羽とてそんなに簡単に引き下がるわけにもいかない。

「バカ言うなよ。どうしてお前一人置いて」

「あなたがいるからといってなにがどう好転するって言うのよッ！

！ あなたに『支配者』^{ドミネーター}になれる可能性があるからといって、今は普通より少し生んでウゴ出来る程度の人間が、あの化物に何が出来るって言うのよッ！！」

「ッ！？」

正論だった。遠回しな言い方などせず、現状ありのままをそのまま口にした正論だった。そして、それゆえに、飾り立ての無い言葉だからこそ、反論の余地などどこにもなかった。

黒羽だって、まだ死にたくはない。

チェインソーやモデルガンを突き付けられた時は足が震えたし、目の前でリーダーの少年が喰われた時は心底死の恐怖を感じさせられた。

そう。

相寄黒羽という人間は、少し運動が出来て、他の人よりも少しだけ覚悟を持っているだけのどこにでもいる高校二年生だ。妹のこと

となるとそれが少し過剰になる傾向があるのだが。

だから、今だって怖い。

目の前にいる圧倒的死亡の存在を、足を震わせて恐怖している。心の隅では二つの思いが葛藤していた。

一つは、死んでもリーバーの前に立ちほだかること。

一つは、逃げる。地の果てまで。

「どうした、何を迷ってル？ オレに喰われないのなら、そこで正座でもしてい口」

リーバーが純白の刀の柄に手をやる。その手すらも、凍えるように白い。まるで温かさをどこかに置いてきたかのように。あるいは、最初からそんなモノは無いかのように。

「逃げなさいッ！」

今度は、命令だった。

いや、そんなことは関係ないのかもしれない。

どんな合図でもよかったのだ。

黒羽はすでに陸上で言うクラウチングスタートの体勢を取っていたのだ。

彼は、地面を蹴った。瓦礫が散らばり、肉片がそこら辺に飛び散っているアスファルトの上を、

脱兎のごとく、逃げだした。

黒羽は、逃げた。惨めにも、目に涙を浮かべながら。

必死に言いわけをした。

相手が強過ぎたのだと。これは高校生には関係の無い話したと。自分が関わっていい世界ではないと。そこまで必死になって戦わなくてもいいんだと。死ぬのは恐いから逃げて当たり前だと。だから必死になって守ってくれたあの少女を見捨ててもいいんだと。

そう考えれば考えるほどに、黒羽の目尻には、涙が浮かんでいた。

走り去った黒羽の背中を、笑いそうな、泣きそうな、二つの感情が半分ずつ混ざった表情で見送るメルディ。

これでいい。

あの少年は、自分が守らなければならない。

そう、思う。

「随分と余裕なのだナ。『唯一者』^{ワンズ}」

「……………どこで、それを聞いたのかしら？ ご主人様にでも？」

「それも、まだ言うべきでないと言われている」

「まあ、いいわ。口を、割らせてあげる」

メルディは鎌を構えた。

リーバーは邪悪な刀を構える。

「オレがどうやって戦っているのか分からないようなら、もうお前に生き残る可能性はないヨ」

「分かっているわよ。だから、今から見つけるんじゃない。今の内にふんぞり返ってなさい。後一時間もすれば、私の靴底を舐めてるだらうから」

「……………フン」

空気が擦れ合う。何もないはずの両者の空間に、濃密な何かが張り詰め、ぶつかり合う。小刻みに震える大気は、まるで両者に脅えるように。

片や、人のまま化物の力をその身に宿した者。

片や、化物のまま人の形に成り変った者。

共に、人外の力をその身に宿す者。

両者の間に、濃密な何かが張り詰めている。

それは、殺気。

「一度は言ってみたい言葉、いつきまーす」

メルディは鎌を大きく振りかぶる。その切っ先には両者の間に張り詰めている濃密な殺気よりも、さらに濃い何かが集約されていた。

「黒羽の物は私の物。私の物は」

それは、多分、
「私の物よオオッ!!」
想い、だ。

2

黒羽は、みつともなく走っていた。もう何で自分が走っているのか分からなくなるほどに、どうして自分がこんなにも苦しい思いをしているのかも分からないまま。

路地裏を抜け出し、すっかり暗くなった街を走る。ときどき誰かにぶつかり罵られながら、それでも足を止めることは無かった。

今になってみれば、すっかり自分のこと以外考えられなくなっていた。

あそこまで紅葉に偉そうなことを言っておきながら、ほんの少し死と直面しただけでこうも簡単に崩れ去り、みつともなく走っている。

どうしてだ。

僕は、どうして、大事な時は。

それでも、足を止めることが出来なかった。少しでもあそこから離れようとして、全く切れるはずの無い息を切らしながら、どんなに走っても平常運転のはずの鼓動を不規則に増減させながら。

黒羽は、夜の街を走っていた。

足を止めることが出来なかった。

気付けば、涙が頬を伝っていた。

「……グゾ！　なんでだよオ、クソッタレ！」

頬にぶつかる空気が一層冷たくなる。吐く息さえ、吐いた瞬間に凍るような冷たさに変わって行く。

昨日まで、いや、昼まであんなに心は満ち溢れていたのに。

なんで、幸せを引き裂こうとした少女が死ぬというだけで、どちらかといえば嬉しいがる場面のはずなのに、なんで、なんで、自分は、

こんなにも苦しまなければならぬんだ。

あの少女を見捨てると思うと、喉の奥から何かが逆流してくるのを感じる。まるで、それ自体が契約に反するかのように。それを破ってしまえば、もう自分は死んでしまいかもしれないと思うほどの苦しみだ。

抑えようのない感情が溢れだす。

頭では、これが最善だということは分かっているのに。

体でも、これに逆らわず足が止まることが無いのに。

なにかが、なにかが自分の行動を堰き止めようとしている。

それでも、足が止まることは無かった。

いつのまにか、周りは誰もいない、どこかの小道に入っていた。

どうやら、無意識の内に紅葉を待たせている場所に走って行っていたようだった。

そのとき、前から人が近づいてくる。思わず身構えた黒羽。体の感覚が鋭敏になり過ぎて、あらゆるものに反応してしまう。

しかし、かけられた声は、聞き慣れた声だった。

「アニキ……？」

紅葉はあの爆発音が聞こえた方にひた走っていた。ほんのりつけてきた化粧が汗で滲んでいくのも構わず、とにかく走った。

あそこに、アニキがいる。

そう思うことで危険にも立ち迎えるような気がした。まるで主人公のように、颯爽と黒羽の危機に駆けつけて助ける。

今まで助けてもらったのだから、今度はこっちが助けたい。

恩着せがましい兄ではない。そんなことを求められていないのも

分かっている。もしかしたら、今から危険に赴く自分のことを叱るかもしれない。もしかしたら本気で心配するのかもしれない。

だけど、助けたいと思う気持ちは本物だから。

「アニキ、アニキ！」

実は、昨日ベッドの横にもたれかかって眠っていたことを紅葉は知っている。そこで涙を流していたことも知っている。いつもとは何か違う雰囲気も感じ取っている。いつものようにふざけていながら、その瞳の奥には何か決意の湯な物があるのも分かっていた。

だからだと思う。

前からフラフラと歩いてくる黒羽に衝撃を受けたのは。

「紅葉……？」

いつものジャージではなく、今日出かけるときに着ていたコート。それが所々ボロボロになっている。

「アニ、キ？ どうしたんだよ」

その声は何故か震えていて、黒羽の今の姿に衝撃を受けているようにも見えた。それもそうだろう。

今まで、紅葉の前でこんな、こんな悲惨な顔は絶対に見せたことが無かったのだから。それは強がりだったし、虚勢だった。張りぼての勇気をいつも立てていただけだったのだ。

思わず、笑った。

口元が歪んでしまうのを感じた。抑えきれない。この笑みはきつと、もう抑えきれない。

悔し過ぎて、抑えきれない。

「どうしたんだよ、アニキ」

心配そうな声色で黒羽に近寄ってきた紅葉。顔は見えていないが、多分今にも泣きそうな表情になっているはずだ。

それでも、笑いが抑えきれない。

楽しくも無いのに、まったくもって楽しくも無いのに。

まだ、虚勢の張りぼてを立てようとしているのだ。この体は。思わず、紅葉から逃げようとした。あんなに一緒に居たかったはずの妹から、一歩ずつ自ら遠ざかって行く。

しかし、紅葉は弱い少年の離れていく体を、抱きしめた。

「アニキ、アニキ……もう、頑張らなくていい。十分、十分だよ。もう、いいんだよ。アニキがこれ以上傷つくことなんてないじゃねえか。アニキがこれ以上、なにかを求められていいはず無いじゃねえか」

その言葉は、傷ついた少年の隙間だらけの心に、一気に染み渡った。

このまま、この優しさに身を任せてもいい。今さっきのことは全て忘れて元の生活に戻ろう。あの少女は死んでしまってもいい。仕方がないのだから。それが運命なのだとしたら、逆らわないほうがいい。分不相応なことは身を滅ぼす。今まで通り、自分とその周りの人間だけを気遣ってあげればいい、そう思った。

そして、そこまで考えてやっと気付いた。

出来るはずが、ない。

（ そうだよ。僕は、弱い。誰かに何かを求められるほど強くは無い。人一人を守るために他の何人も人間を傷つけてきた大馬鹿野郎だ）

だけど、そこで諦められるはずがない。

分かってた。分かってたはずなんだ。

自分が逃げてしまったことも。あの場に居ても自分は何の役にも立たなかったことは分かっている。逆に足手まといになっていただろう。

だけど、そこで見捨てていい理由なんかにはなりはしない。そんなことで、そんなことで逃げていい免罪符なんかにはなりはしない。だからだと思っ。

黒羽は、紅葉の抱きついた指を一本ずつゆっくり外した。

「ア二、キ？」

「……ああ。思い出したよ。お母さんとの約束、まだ、コレだけじゃ半分しか守れてない」

最後の一本を外した。

顔には、まだわだかまりが残っている。

しかし、それは自虐的なものではない。

立ち上がる理由は変わらない。立ち向かう勇氣も変わらない。張りぼてでもいい。虚勢でも強がりでもいい。

それでもなお、彼が立ち上がる理由があるとすれば、それは、

「 僕が、僕であるためだ」

黒羽は立ち上がった。

もう、足を止めるつもりは、欠片もなかった。

第四章 1節・2節（後書き）

ご感想ご批判ご指摘、お待ちしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8009w/>

僕が奴隷である娘がご主人様

2011年10月11日01時29分発行